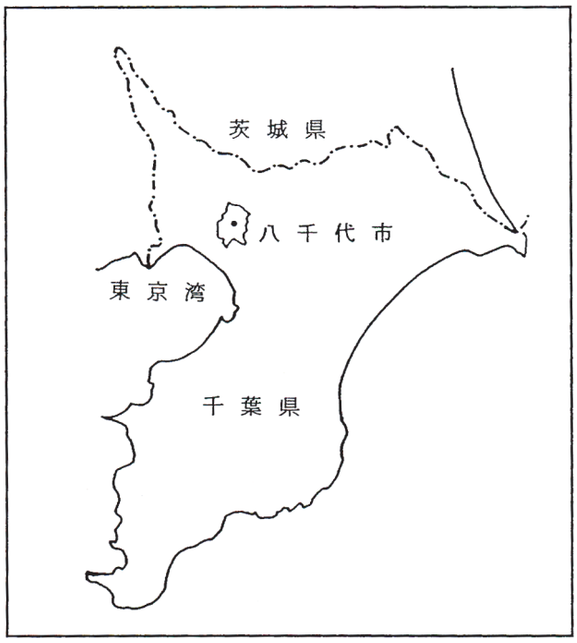
千葉県八千代市

川崎山遺跡m地点発掘調査報告書



2 0 0 8

八千代市教育委員会

前文.indd 1 08.6.1 11:43:11 AM

序　　文

八千代市は千葉県北部に広がる下総台地の北西部に位置しています。下総台地は，印旛沼・手賀沼・利根川など豊かな水源と，一年を通しての温暖な気候を背景として，旧石器時代以来，多くの人々が生活を営んできました。こうした恵まれた自然環境のもと，八千代市においても，旧石器時代以来の多くの人々の生活の息吹が遺跡の発掘調査によって次第に明らかにされつつあります。

八千代市は東京より30㎞圏に位置する近郊住宅都市として全国でもまれに見る人口増加で急成長を遂げ，近年においては市内２ヶ所において大学と住宅地がセット開発され，学園都市としての側面もあわせ持つようになりました。このように急速に発展を遂げた八千代市でありますが，市域中央を流れる新川沿いなどには，今なお，豊かな自然が残されています。これからも八千代市は水と豊かな環境を守りながら，着実に発展してゆくことと思われます。

今回ここに報告いたします川崎山遺跡は市域中央の萱田地区に位置し，付近には東葉高速鉄道八千代中央駅を中心としたゆりのき台の町並みが広がる，八千代市でも市街化が新たに進んでいる地区に所在します。平成19年２月，この地に宅地造成の計画がおこり予定地内に所在する埋蔵文化財について関係機関による慎重な協議を重ねた結果，現状保存は困難であるとの結論に至り，記録保存の措置として，発掘調査を行うこととなりました。

八千代市内では，これまでも多くの遺跡の発掘調査が行われています。今回の調査では，縄文時代の竪穴住居跡・落とし穴等が調査され，多くの成果を得ることが出来ました。本報告書が学術資料としてはもとより，教育資料として，そして地域の歴史に興味を持たれている方々に大いに活用されれば幸いです。また，埋蔵文化財についてより多くの方々の理解を深め，文化財保護についての関心を高めることに寄与できるよう願ってやみません。

最後になりましたが，発掘調査から報告書に至るまでの間，ご指導，ご助言を頂いた千葉県教育委員会及び関係諸氏，関係各機関の皆様方に深く感謝いたします。また，発掘調査，報告書作成作業に従事された調査補助員，整理補助員の方々にも深く御礼申し上げます。

平成20年３月31日

八千代市教育委員会
教育長　萩　原　康　正

前文.indd 3　08.6.1 11:43:11 AM

凡　　例

1　本書は，千葉県八千代市萱田に所在する，川崎山遺跡m地点の発掘調査報告書である。

2　調査は，八千代市教育委員会が実施した。

3　調査遺跡の所在地，期間，調査原因等は，下記のとおりである。

遺跡名　　川崎山遺跡　m地点

所在地　　八千代市萱田字中台2265－２　外

確認調査

調査期間　2007（平成19）年３月15日～2007（平成19）年３月31日

調査面積　793㎡/9,791.91㎡

調査原因　宅地造成

本調査

調査期間　2007（平成19）年５月７日～2007（平成19）年６月29日

調査面積　1,290㎡

調査原因　宅地造成

4　整理作業及び報告書作成作業は，2007年９月１日～2008年３月29日までの期間行った。

5　本書の編集・執筆は，宮澤久史が行った。野外調査及び室内作業での写真撮影は主に高屋麻里子が行った。

6．出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。

7．本書，図１に使用した地形図は，八千代市発行の2,500分の１八千代都市計画基本図（平成13年修正）№19を使用した。

8．本書，図２に使用した地形図は，国土地理院発行の50,000分の１地形図『佐倉』を基に作成した。

9．各実測図の縮尺については，原則として下記のとおりである。

竪穴住居跡・掘立柱建物跡･遺構・･･１/60　　土坑・・・１/40

縄文土器・・・１/３　弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石製品･･･１/４

10．本書に使用したスクリーントーン表示は以下のとおりである。

焼土　　粘土

11．発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては，関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導，ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同，敬称略）

千葉県教育委員会　八千代市立郷土博物館　中野修秀　玉井庸弘　峰村　篤　柿沼修平　内田武志　斉藤瑞穂

目　　次

序　文
凡　例
目　次
挿図目次

第１章　序　説……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……2
　第３節　遺跡の位置と歴史的環境……4
　第４節　調査の概要……9
第２章　調査された遺構と遺物……14
　第１節　縄文時代……14
　第２節　弥生時代……30
　第３節　奈良・平安時代……34
第３章　成果と課題……38
　第１節　縄文時代……38
　第２節　弥生時代……40
　第３節　奈良・平安時代……41

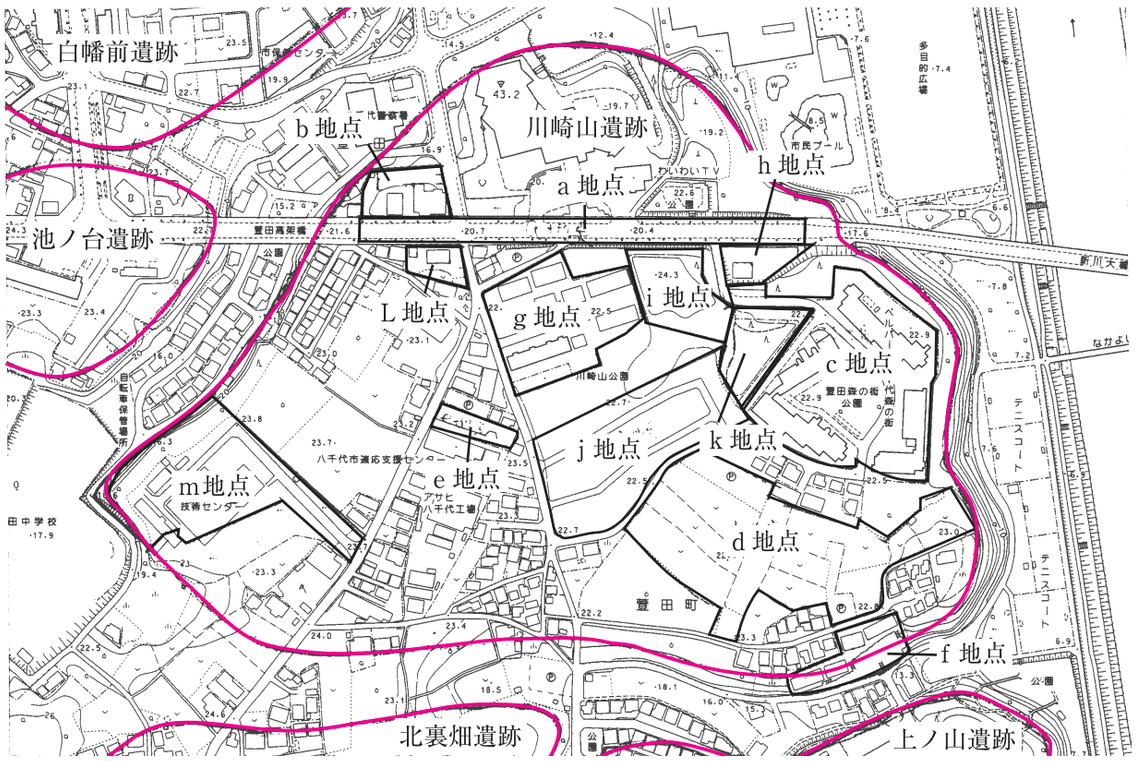
図　版

挿　図　目　次

第１図　川崎山遺跡周辺地形図（１）……1
第２図　確認調査遺構配置図……3
第３図　川崎山遺跡周辺地形図（２）……4
第４図　周辺遺跡分布図……6
第５図　川崎山遺跡遺構配置図……9
第６図　００４Ｄ（１）……15
第７図　００４Ｄ（２）……16
第８図　００５Ｄ（１）……17
第９図　００５Ｄ（２）……18
第10図　００６Ｄ……20
第11図　００７Ｄ（１）……21
第12図　００７Ｄ（２）……23
第13図　００７Ｄ（３）……24
第14図　００１Ｉ，００６Ｐ……25
第15図　００７Ｐ～０１０Ｐ，０１２Ｐ……27
第16図　遺構外出土遺物……28
第17図　００２Ｄ（１）……30
第18図　００２Ｄ（２）……31
第19図　００２Ｄ（３）……32
第20図　００２Ｄ（４）……33
第21図　００３Ｄ（１）……34
第22図　００３Ｄ（２）……35
第23図　０１１Ｐ，０１３Ｐ，０１４Ｐ……37

第１章　　序　　説

第１節　調査にいたる経緯



第１図　川崎山周辺地形図（１）

取り扱いの協議から確認調査まで　　平成 19 年 2 月，八千代市萱田字中台 2265- 2 外の土地について，株式会社細田工務店　代表取締役　今村民夫氏（以下，「事業者」という。）から宅地造成に伴い，「埋蔵文化財の取り扱いについて」の協議文書が八千代市教育委員会（以下,「市教委」という。）に提出された。対象地は市遺跡 No.241 川崎山遺跡の範囲内であり，過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から，本照会地においても遺構が検出される可能性を考慮し，市教委は，対象地 9,791.91 ㎡に対して全域「遺跡有り」の回答を行い，工事にあたっては，発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後，市教委と関係諸機関の間で発掘調査実施の為の協議が進められ，平成 19 年 3 月に文化財保護法（以下,「法」という。）第 93 条による土木工事の届出が事業者から届出され，市教委から法第99条による発掘調査の通知を提出し，準備の整った平成 19 年 3 月 15 日から遺跡の範囲や性格を把握するための確認調査を実施することとなった。

確認調査から本調査まで　　確認調査は，市教委が，八千代市の平成19年度市内遺跡発掘調査事業として，平成19年3月15日から実施した。結果，縄文時代の竪穴住居跡 5 軒のほかに弥生時代の竪穴住居跡 1 軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒などを検出した。この結果を踏まえ，市教委は開発区域内の 1,290㎡については引き続き協議が必要であると判断し，その旨を伝えた。

確認調査の結果を受け，市教委と事業者及び関係各機関との間で再び協議が進められ，協議範囲 1,290 ㎡について，埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り，記録保存の措置として，発掘調査を実施することとなった。平成 19 年 4 月 16 日事業者から八千代市長あて発掘調査依頼が提出され， 4 月 18 日，発掘調査を受託決定し，市教委は，平成 19 年度の民間開発事業の直営調査として平成 19 年 4 月 20 日から本調査を実施することになった。

1.indd 1　　08.6.1 11:57:54 AM

第２節　調査の方法と経過

確認調査　　調査区の現況は，建物解体後の荒蕪地であった。調査の方法としては，調査区の形状にあわせ任意で５ｍ×５ｍのグリッドを設け，グリッドをもとに２ｍ×４ｍのトレンチを適宜配置し，遺物包含層の有無，遺構の配置状況等の把握に努めた。調査の進捗にあわせ，写真撮影，図面作成等の記録作業を実施した。写真撮影には，35㎜モノクロフィルム，カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては，各グリッド杭を基準としながら，従来の遣り方実測を行った。

調査期間は，平成19年3月15日から平成19年３月31日である。３月15日に機材搬入等環境整備を行い，16日～19日にトレンチ設定，19日～23日，手掘りによる遺物包含層調査を実施する。遺物包含層調査と平行して20日から重機による表土除去作業を行った。23日からは，遺構検出作業を開始した。27日遺構検出作業を終了し，同日埋め戻し作業に移る。31日，機材撤収と重機による埋め戻し作業を終了し，確認調査の工程を終了した。

確認調査の結果として，縄文時代中期の竪穴住居跡５軒，竪穴状遺構１基，土坑３基，弥生時代の竪穴住居跡１軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒，近世の溝１条を検出した。遺物包含層は検出されなかった。

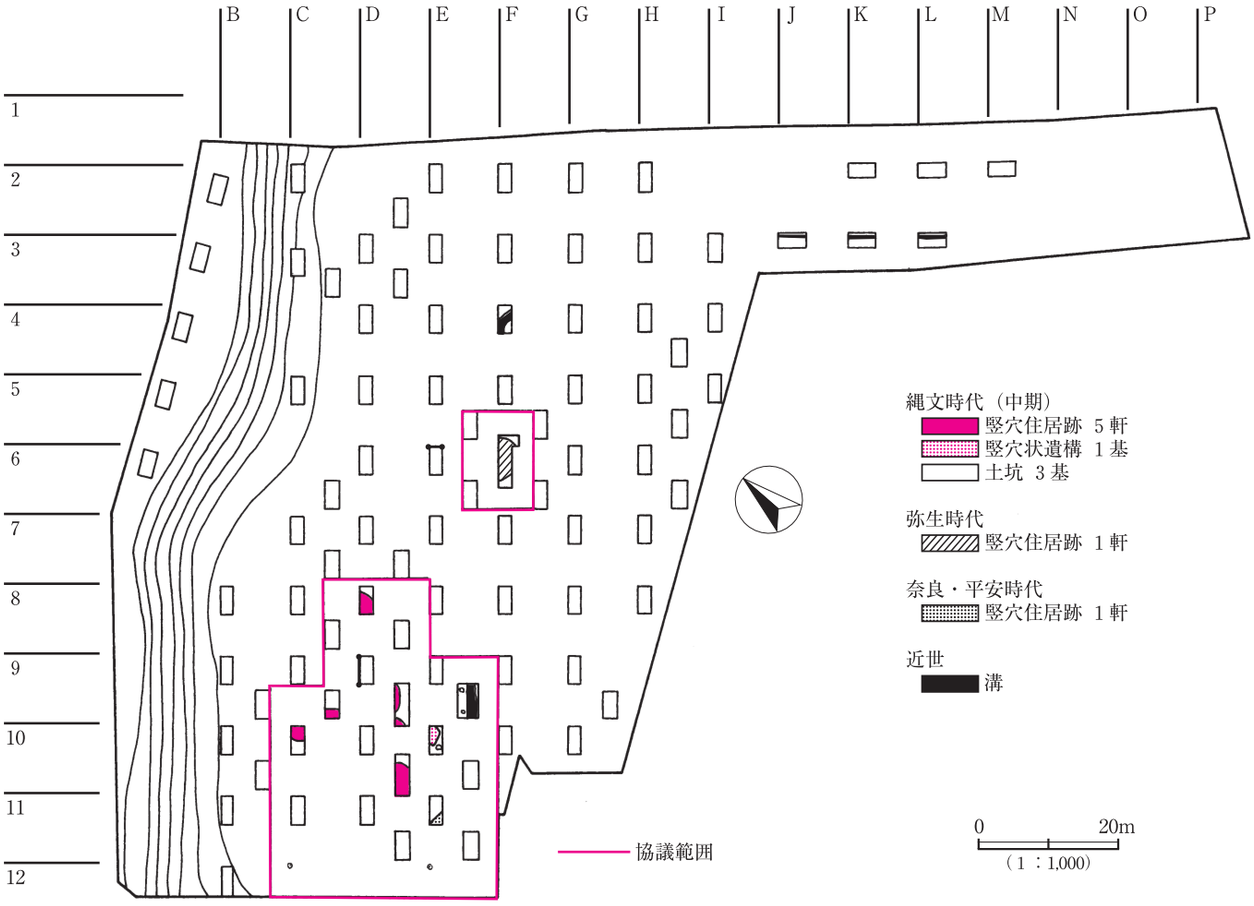
本調査　　確認調査によって確定した調査区域を重機で表土除去作業を行った。表土除去後，ソフトローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については，土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ，写真撮影，図面作成等の記録作業を実施した。写真撮影には，ブローニー判のモノクロフィルム，カラーリバーサルフィルムを中心に使用し，補助的に35㎜モノクロフィルム，カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては，公共座標に合わせグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては，５ｍ単位で設定し，各グリッド杭を基準としながら，光波測距儀による測定と従来の遣り方実測を適宜併用して行った。

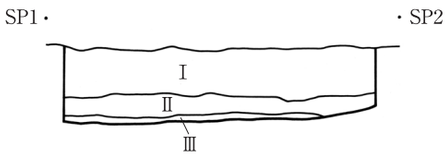
調査期間は，平成19年４月20日から平成19年６月29日である。４月20日～５月６日の間は，現地打ち合わせ等の本調査に向けての準備を行い，７日から実質的な調査開始となる。７日～９日機材搬入等環境整備，９日～22日重機表土除去作業，18日から遺構検出作業，23日，遺構検出状況写真撮影，24日から基準点測量を行い，遺構調査開始した。６月28日に完掘全景写真を撮影し，６月29日機材の撤収を行い，全工程を終了した。

確認調査風景　1

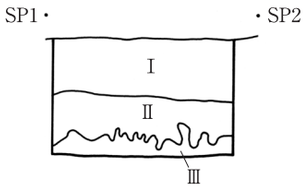
本調査風景　2

1.indd 2　　08.6.1 11:59:42 AM





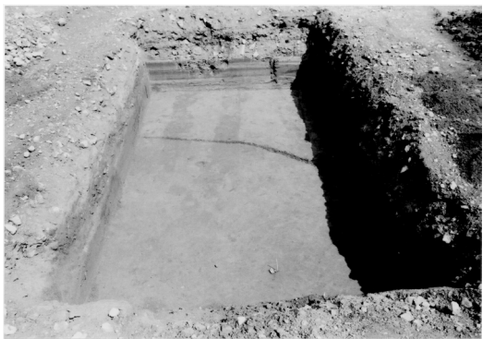
D－9G



E－6G

Ⅰ　表土（埋土）
Ⅱ　ソフトローム漸移層
Ⅲ　ソフトローム
Ⅳ　ハードローム

0 2m
（1：80）

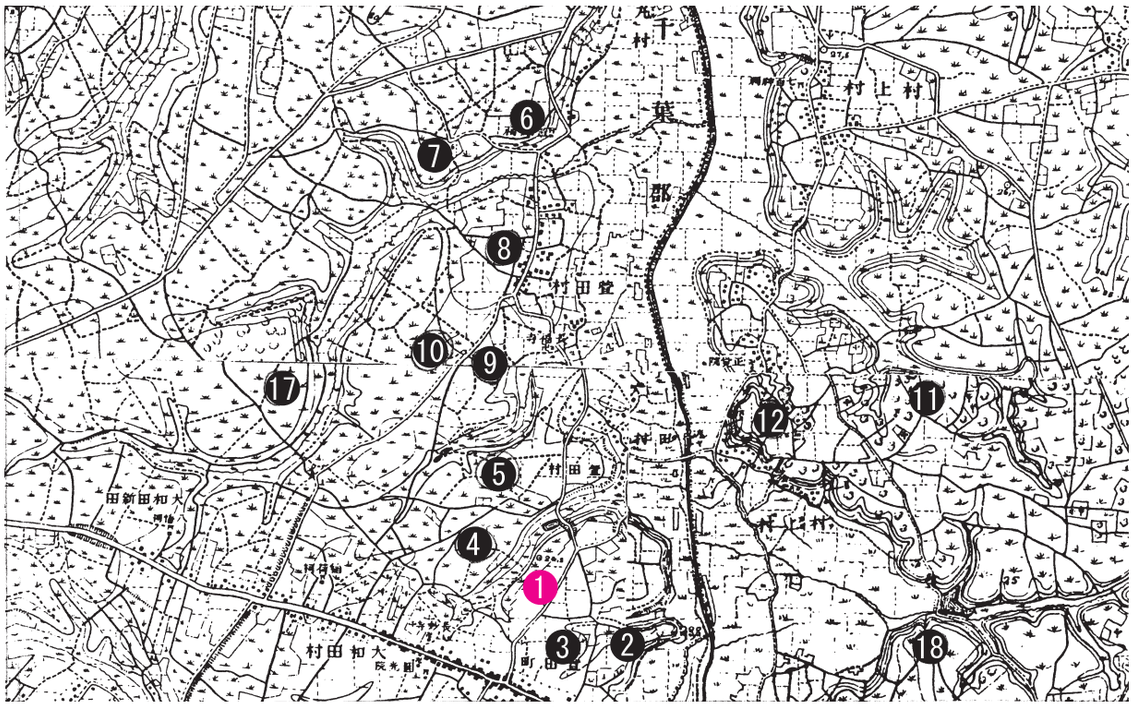


D－8G

F－6G

第2図　川崎山遺跡m地点　確認調査遺構配置図

1.indd 3　08.6.1 0:00:18 PM



第３図　川崎山遺跡周辺地形図（２）

川崎山遺跡（１）の所在する八千代市は，千葉県北西部に位置する。八千代市の地形は，市域中央を流れ，印旛沼に西から注ぎ込む新川とその支流の桑納川によって大きく三つに区分され，さらに神崎川・桑納川・高津川等の河川により，複雑な樹枝状の谷津が発達する台地が形成されている。市域の台地の一般的傾向として，南側は急傾斜で，北側は段丘状の地形を形成している。台地の標高は，14～30ｍで，東京湾と印旛沼との分水界を起点として南西部で高く，北東にかけて徐々に低くなる。

川崎山遺跡は，市域中央の新川西岸の萱田地区に位置し，現在，東葉高速鉄道や千代中央駅から徒歩10分ほどの台地上に位置している。本遺跡が所在する台地は，東側を新川を接し，南北は新川から入り谷津よって区切られている舌状台地である。川崎山遺跡は，その舌状台地上全体に展開している。標高は約23ｍで，新川の低地からの比高差は約15～16ｍである。

川崎山遺跡の周辺遺跡としては，川崎山遺跡の谷津を隔てた南側に，上ノ山遺跡（２），北裏畑遺跡（３）が所在し，同じく谷津を隔てた北側には池ノ台遺跡（４），白幡前遺跡（５）が展開している。川崎山遺跡の周囲は，遺跡が濃密に集中している地区で萱田遺跡群とも総称されている。萱田遺跡群は，新川西岸の萱田地区に展開する遺跡群で，北から権現後遺跡（６），ヲサル山遺跡（７），北海道遺跡（８），井戸向遺跡（９），坊山遺跡（10），白幡前遺跡と展開し，これらの遺跡は，かつて1980年代に（財）千葉県文化財センターによって大規模調査がされ成果を挙げた遺跡群である。さらに白幡前遺跡の南側には，池ノ台遺跡，川崎山遺跡，上ノ山遺跡と遺跡が展開している。萱田遺跡群の南側の遺跡は，主に市教委で調査を行っていて，川崎山遺跡はその中では，面的な調査が行われている遺跡である。

また，八千代市内で遺跡が集中的に展開する地区として，萱田遺跡群に対して新川を越えた東岸の村上地区に，学史的にも著名な村上込ノ内遺跡（11）や浅間内遺跡（12）をはじめとする村上遺跡群，市域北東部の印旛沼に程近い地区に栗谷遺跡（13），上谷遺跡（14）に代表される保品・神野遺跡群，市域西部に仲ノ台遺跡（15），ヲイノ作南遺跡（16）などに代表される西八千代遺跡群などがある。

1.indd 4　08.6.1 0:00:19 PM

次に周辺の遺跡について，八千代市を中心に時代順に簡単にまとめてみたい。

旧石器時代　川崎山遺跡を含む萱田遺跡群では権現後遺跡，ヲサル山遺跡，北海道遺跡，井戸向遺跡，坊山遺跡，白幡前遺跡で多くの石器群が調査されている。中でも，権現後遺跡では6つの文化層，24のブロックが検出され，最も古い文化層からは，局部磨製石斧が出土している。萱田遺跡群から若干の距離を隔てるが向山遺跡（17）でも遺物集中地点を確認している。新川を挟んだ村上遺跡群においては，先ず，村上込ノ内遺跡のⅢ層で礫群が調査されている。さらに沖塚遺跡（18），浅間内遺跡で多くの石器群が調査されている。沖塚遺跡では，千葉県文化財センターによる調査で17ヶ所，八千代市の調査で2ヶ所の石器集中地点を検出し，浅間内遺跡では4箇所の石器集中地点を検出している。高津川流域においては，一本松前遺跡（19），高津新山遺跡（20）で遺物集中地点が検出されている。

縄文時代　早期の遺跡としては，多数の撚糸文期の土器を出土した上谷遺跡，向境遺跡（21），境堀遺跡（22）などがあり，向境遺跡では，撚糸文末期の無文・擦痕土器（平坂・天矢場式）がまとまって出土している。上谷遺跡では多数の条痕文期の遺物や炉穴も検出している。同様に条痕文期の炉穴を多数検出した遺跡に間見穴遺跡（23）などがある。川崎山遺跡を含む萱田遺跡群においてもヲサル山遺跡などで炉穴が調査され，また，早期の遺物が多数出土している。新川東岸域では，浅間内遺跡や上高野地区に所在する新林遺跡（24）などで撚糸文期の遺物が少量出土している。また，これまで八千代市の早期遺跡では，ヲサル山遺跡で若干の遺物出土はみていたものの，撚糸文期と条痕文期にピークがあり，その間の沈線文期にやや空白期があったことが特徴として挙げられていた。しかし近年，ヲサル山南遺跡（25）や今回の調査地点である川崎山遺跡m地点などで沈線文期の資料が蓄積されつつある。

前期の遺跡としては，先ず，西八千代遺跡群が挙げられ，黒浜期の遺構を中心とした仲ノ台遺跡，ヲイノ作遺跡（26），ヲイノ作南遺跡，芝山遺跡（27），内野南遺跡（28）等がある。芝山遺跡，ヲイノ作南遺跡等からは，縄文時代の陥穴も多数検出されている。保品地区の栗谷遺跡においても黒浜期の竪穴住居跡2軒が調査されている。上高野地区では，浮島期の遺跡として二重堀遺跡（29）黒沢池上遺跡（30），新林遺跡等がある。西八千代地区，上高野地区いづれも，前期の遺跡群が谷津の奥部に展開していることが示唆に富む。

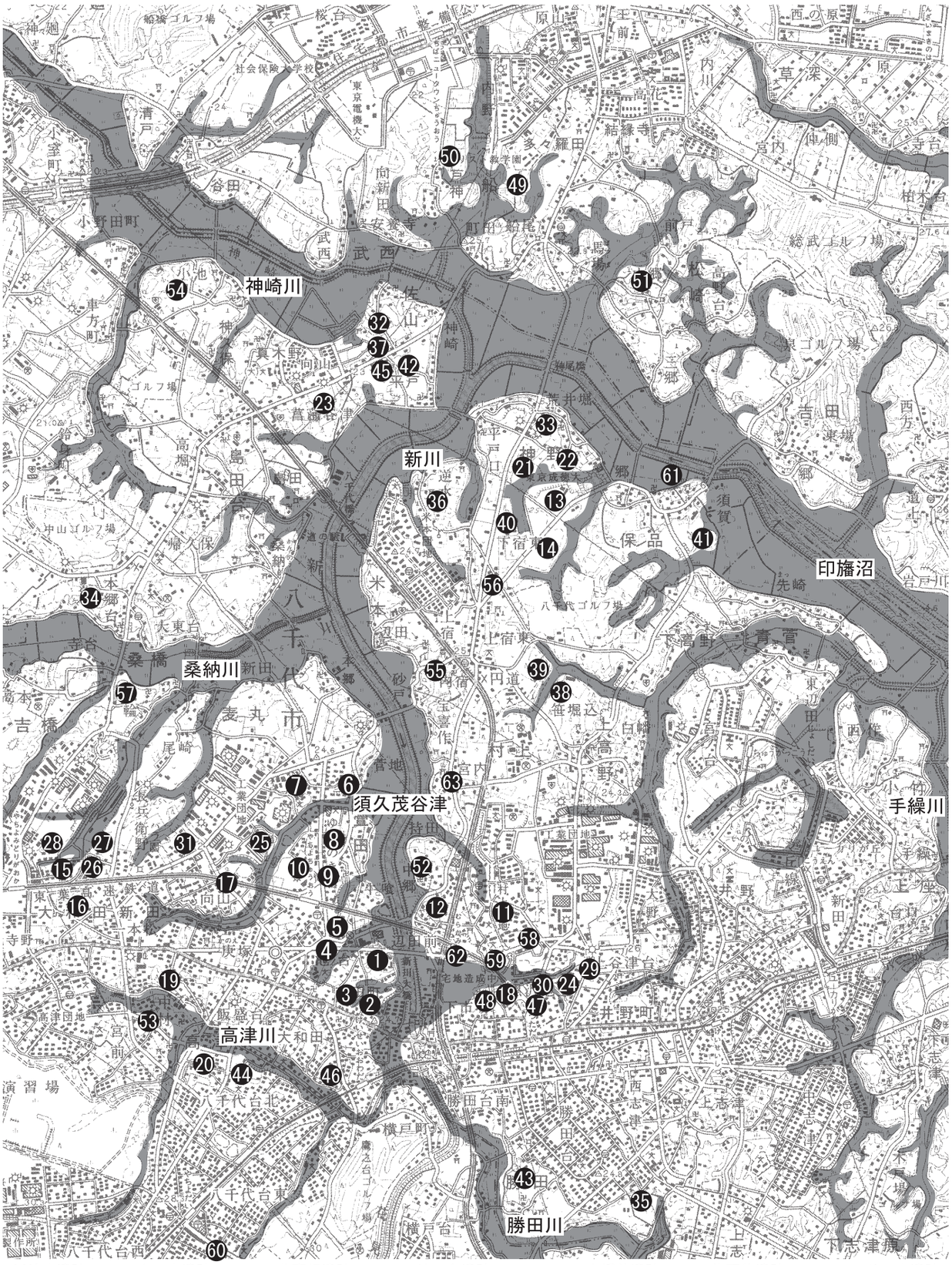
中期初頭五領ヶ台式期の遺跡としては前述の上谷遺跡があり，五領ヶ台式土器とともに土坑多数を検出している。中期前半の阿玉台式期になると八千代市内で縄文中期の遺構，遺物が増加してくる。村上の浅間内遺跡で2軒の阿玉台式期の竪穴住居跡とともにⅠa・Ⅰb期の阿玉台式土器が比較的まとまって出土している。その他に阿玉台式期の住居跡としての萱田地区ではヲサル山遺跡で1軒，ヲサル山南遺跡で8軒検出している。向境遺跡・境堀遺跡においても比較的多量の阿玉台式土器が出土している。ヲサル山遺跡，境堀遺跡では，阿玉台式土器とともに土器片錘もまとまって出土している。八千代市における阿玉台式期の様相としては，Ⅰa・Ⅰb期にピークがありⅡ式期までに集中し，Ⅲ式期以降，阿玉台式期の遺跡が減少するようである。中期後半の加曽利E式期では，坊山遺跡で1軒，新林遺跡で2軒，長兵衛野南遺跡（31）で2軒，栗谷遺跡で3軒がある。

また，中期から後期の貝塚として，佐山地区，神野地区にそれぞれ，佐山貝塚（32），神野貝塚（33）がある。いずれもヤマトシジミを中心とする汽水性の貝塚とされている。

後期堀之内式期の遺物を出土する遺跡に本郷台遺跡（34），加曾利B式期の遺跡として新東原遺跡（35）がある。また，近年，船橋市との市境を流れる桑納川から後晩期の土器が大量に採集されたことが注目されている。

また，保品地区の大江間遺跡（61）では，縄文時代の刳り舟が出土しており，晩期の所産とされている。

1.indd 5 08.6.1 0:02:37 PM



1．川崎山遺跡　2．上ノ山遺跡　3．北裏畑遺跡　4．池ノ台遺跡　5．白幡前遺跡　6．権現後遺跡　7．ヲサル山遺跡
8．北海道遺跡　9．井戸向遺跡　10. 坊山遺跡　11. 村上込ノ内遺跡　12. 浅間内遺跡　13. 栗谷遺跡　14. 上谷遺跡
15. 仲ノ台遺跡　16. ヲイノ作南遺跡　17. 向山遺跡　18. 沖塚遺跡　19. 一本松前遺跡　20. 高津新山遺跡　21. 向境遺跡
22. 境堀遺跡　23. 間見穴遺跡　24. 新林遺跡　25. ヲサル山南遺跡　26. ヲイノ作遺跡　27. 芝山遺跡　28. 内野南遺跡
29. 二重堀遺跡　30. 黒沢池上遺跡　31. 長兵衛野南遺跡　32. 佐山貝塚　33. 神野貝塚　34. 本郷台遺跡　35. 新東原遺跡
36. 逆水遺跡　37. 田原窪遺跡　38. 平沢遺跡　39. 阿蘇中学校東側遺跡　40. 役山東遺跡　41. おおびた遺跡　42. 道地遺跡
43. 勝田大作遺跡　44. 内込遺跡　45. 平戸台古墳群　46. 堰場台古墳　47. 黒沢台古墳　48. 沖塚古墳　49. 船穂白幡遺跡
50. 鳴神山遺跡　51. 前戸遺跡　52. 正覚院館跡　53. 高津館跡　54. 作山遺跡　55. 米本城跡　56. 下宿東遺跡
57. 吉橋城跡　58. 村上第１塚群　59. 村上第２塚群　60. 高津新田野馬堀遺跡　61. 大江間遺跡　62. 根ノ上神社古墳　63. 七百余所神社古墳

S＝１/50,000

第４図　周辺遺跡

1.indd 6　08.6.1 0:02:39 PM

弥生時代　今回の調査地点で，弥生時代の遺構は後期の竪穴住居跡１軒であったが，周辺遺跡を含め，弥生時代～古墳前期の遺跡が八千代市内では大きく展開する。中期後半の宮ノ台式期にあっては，前述の栗谷遺跡で５軒の竪穴住居跡と12基の方形周溝墓群とが，有機的な関連を想定できる状態で検出された。米本地区の逆水遺跡（36）では，栗谷遺跡とほぼ同時期であろう方形周溝墓群が調査されている。また，宮ノ台式期の環濠集落として佐山地区の田原窪遺跡（37）を挙げることができる。村上地区では，沖塚遺跡において中期前半期の土器が出土しており，市内では最古の弥生土器となっている。

後期に至ると川崎山遺跡が所在する萱田遺跡群ではヲサル山遺跡，白幡前遺跡，井戸向遺跡，北海道遺跡，権現後遺跡から合計172軒の弥生後期～古墳前期の住居跡が報告されている。川崎山遺跡でもこれまで26軒の竪穴住居跡が調査され，さらに南側の小支谷を隔て上ノ山遺跡で弥生時代後期の住居が５軒調査されている。村上遺跡群の中では，村上込ノ内遺跡で14軒，浅間内遺跡で19軒の竪穴住居が調査されている。上高野地区には後期の竪穴住居跡10軒を調査した平沢遺跡（38）がある。道路幅での調査で，遺跡の範囲はさらに広がる状況であった。平沢遺跡の対岸にあたる阿蘇地区に，阿蘇中学校東側遺跡（39）がある。

保品・神野遺跡群の栗谷遺跡は，弥生中期宮ノ台式期から古墳前期にかけての集落が継続的に営まれているが，中でも弥生時代後期にあっては１遺跡で92軒の竪穴住居跡を検出し，印旛沼南岸では最大級の弥生集落とされている。萱田遺跡群において出土している後期弥生土器が南関東系土器が主体であるのに対し，栗谷遺跡出土の土器は，南関東系土器，東関東系の土器に加え，どちらにも属さない在地特有の土器（臼井南式あるいは栗谷式）が出土し，バリエーションが豊富である。直線距離にして３.５キロ程度の位置関係にありながら出土土器の様相が異なり，栗谷遺跡は，規模もさることながら，八千代市だけに限らず，印旛沼周辺域の弥生時代後期の様相を知る手掛かりとなる上でも重要である。栗谷遺跡の周辺遺跡として役山東遺跡（40），境堀遺跡，上谷遺跡，おおびた遺跡（41）が所在する。栗谷遺跡とは新川を隔てた対岸の佐山地区には，道地遺跡（42）があり，道路幅の調査であるにも関わらず，弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡を 75 軒検出しており，規模・質で栗谷遺跡を上回る可能性をもっている。

古墳時代　前期の集落では，栗谷遺跡で23軒の竪穴住居跡と２基の方形周溝墓が検出され，前述の宮ノ台式期と比較することによって示唆に富む事例を提供している。佐山地区での間見穴遺跡では，17軒の竪穴住居跡を検出している。また，市域南部の勝田地区の勝田大作遺跡（43）で６軒の住居跡が調査されている。

古墳時代中期以降で，まとまった軒数が検出されている集落遺跡をみてみると，中期では，北海道遺跡で22軒，後期では，内込遺跡（44）で20軒の竪穴住居跡が調査されている。また，中期～後期の遺跡として向境遺跡では，調査された住居跡が５軒であるが，カマド出現前後の状況を知る上で良好な資料を提供している。さらに権現後遺跡，川崎山遺跡h地点などが中期～後期の遺跡として挙げることができ，川崎山遺跡h地点では石製模造品工房跡が検出されている。

周辺の古墳として，佐山地区では，間見穴遺跡で前期と後期の古墳が計９基調査されている。また，６～７世紀の古墳として平戸台２号墳（45）があり，９基で構成される平戸台古墳群となっている。大和田地区に箱式石棺のみの調査の堰場台古墳（46），村上地区には，市内唯一の前方後円墳で市指定文化財となっている根の上神社古墳（62），円墳であるが同じく市指定文化財となっている七百余所神社古墳（63）があり，方墳として黒沢台古墳（47），円墳で貝化石の主体部を検出した沖塚古墳（48）がある。小規模古墳が数基単位で小古墳群を形成する点に八千代市の古墳の特徴がある。

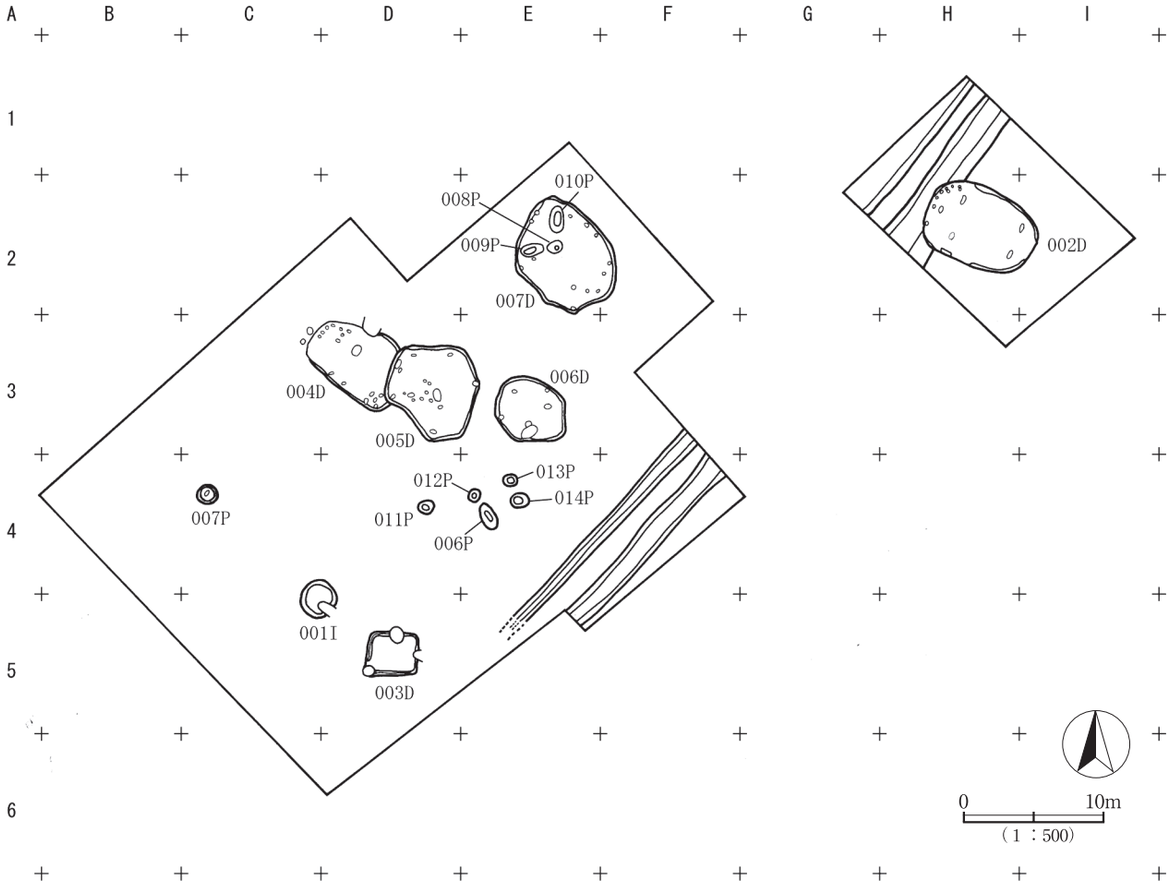
1.indd 7　08.6.1 0:02:39 PM

奈良・平安時代　八千代市では，8世紀後半から9世紀にかけて集落が急速にかつ大規模に形成されるようになる。川崎山遺跡を含む新川中流域には萱田遺跡群・村上遺跡群が展開し，新川を下り，印旛沼西部南岸には，上谷遺跡，栗谷遺跡をはじめとする保品・神野遺跡群が展開する。これらの遺跡群は『和名類聚抄』にある「下総國印波郡村神郷」に比定されている。多量の文字資料，仏教的遺物，生産・生活・儀礼などに関わる鉄器が出土し，竪穴住居跡以外に掘立柱建物跡・手工業生産を行った遺構が調査されている。また，印旛沼西部北岸には「印波郡船穂郷」に比定される船穂白幡遺跡（49），鳴神山遺跡（50）が所在し，小規模な調査ながら瓦塔を出土した前戸遺跡（51）があり，各遺跡の分析から大規模な地域の開発の様相がうかがえる。村上遺跡群の村上込ノ内遺跡では164軒の竪穴住居跡と24棟の掘立柱建物跡を検出している。同様に浅間内遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡54軒，掘立柱建物跡10棟などを検出している。萱田遺跡群では権現後遺跡で竪穴住居跡69軒，掘立柱建物跡21棟，北海道遺跡で竪穴住居跡116軒，掘立柱建物跡10棟，井戸向遺跡で竪穴住居跡102軒，掘立柱建物跡48棟，白幡前遺跡で竪穴住居跡279軒，掘立柱建物跡150棟をそれぞれ検出している。中でも白幡前遺跡では四面庇の掘立柱建物跡や，瓦塔を出土していることから，村落内宗教施設の存在等も指摘されている。保品・神野遺跡群においては栗谷遺跡で55軒の竪穴住居跡，13棟の掘立柱建物跡が調査され，上谷遺跡では竪穴住居跡203軒，掘立柱建物跡194棟，向境･境堀遺跡では竪穴住居跡32軒，掘立柱建物跡13棟が調査されている。これらの遺跡は，いずれも多量の墨書土器を出土し，特に白幡前遺跡や上谷遺跡では長文の墨書土器が出土していることで注目されている。

中世・近世　中世では，館跡として土塁・堀の遺構が検出され，康応2（1390）年銘の武蔵型板碑，北宋銭，陶磁器片等が出土した正覚院館跡（52）や高津館跡（53），中世の土坑墓群が調査された作山遺跡（54）がある。戦国期には，米本城跡（55）があり，米本城に関連する遺跡として下宿東遺跡（56）がある。同様の戦国期の城跡として吉橋城跡（57）があり，関連する遺跡として妙見前遺跡がある。

近世では，近世に構築されたと考えられる村上第1塚群（58）村上第2塚群（59）があり，古銭・小皿・殊子玉などが出土している。塚の形態・規模，盛土の状況などに共通点は見られず，遺構の性格については不明とされているが，村ないしは部落全体の共通目的下にあった民間信仰に関連する所産ではないかと推察している。その他の近世遺跡として，萱田町に所在する北裏畑遺跡があり，近世の陶磁器が出土している。保品・神野遺跡群では，向境遺跡，境堀遺跡に跨る状況で近世の神野群集塚と近世の害獣駆除のためと思われる土塁と溝（しし垣き）が調査されている。上高野地区の新林遺跡e地点でもしし穴と溝が検出されている。また，千葉市との市境である八千代台南地区には高津新田野馬堀遺跡（60）があり，近世下総小金牧の一つである下の牧の一部となる野馬土手の一部と堀が調査され，野馬土手の外側に広がっている高津新田遺跡では，多量の泥面子が表採されている。

1.indd 8　08.6.1 0:02:39 PM



第５図　遺構配置図

本節では，川崎山遺跡の過去の調査履歴に触れながら，今回検出された遺構・遺物が川崎山遺跡全体の中でどのように位置付けられるのか時代ごとに概観してみる。先ず，今回の川崎山遺跡ｍ地点で検出された遺構は，縄文時代の竪穴住居跡４軒，陥穴１基，竪穴状遺構１基，土坑４基，弥生時代の竪穴住居跡１軒，奈良･平安時代の竪穴住居跡１軒，土坑４基，近世・近代の溝２条である。また，基本的な層序は，Ⅰ層表土，Ⅱ層ソフトロームであったため，遺物包含層は検出されなかった。

川崎山遺跡は，過去ａ地点～ｎ地点の14地点で調査がされている。過去の調査は，主に新川に面した台地東側を中心に行われ，旧石器時代～奈良・平安時代まで各時代の遺構，遺物が検出されている。縄文時代については，台地全体に陥穴が台地全体に散在する状況で検出されている。弥生時代については，中期の遺構，遺物の検出はなかったが，弥生時代後期以降では，台地東側先端部から平坦部にかけて，集落が展開している。集落は奈良・平安時代まで断続的に営まれるが，ピークは古墳時代中期にあり，古墳時代後期になると，規模が急速に縮小する。（表１　参照）

今回の調査地区であるｍ地点は，新川から奥まった台地西側の舌状台地の基部にあたる部分で，これまでの調査地点とは，立地上の様相を異にする。検出された遺構も縄文時代中期阿玉台式期を中心とする竪穴住居跡群で，これまでの調査では無かった所見を得ることができた。

1.indd 9　　08.6.1 0:02:41 PM

表１　川崎山遺跡の遺構概要

	住　居　跡							陥　穴
	縄　文	弥　生	古墳（前期）	古墳（中期）	古墳（後期）	奈良・平安	住居跡合計	縄　文
a 地点	0	4	0	3	0	0	7	0
b 地点	0	0	0	0	0	0	0	1
c 地点	0	13	10	27（3）	2	2	54（3）	13
d 地点	0	5	19	1	0	1	26	17
e 地点	0	0	0	0	0	0	0	1
f 地点	0	0	0	0	0	2	2	0
g 地点	0	0	0	0	0	0	0	4
h 地点	0	3	0	2	1	0	6	0
i 地点	0	0	0	0	0	0	0	0
j 地点	0	0	0	0	0	0	0	3
k 地点	0	1	0	0	0	0	1	0
l 地点	0	0	0	0	0	0	0	0
m地点	4	1	0	0	0	1	6	1
合　計	4	27	29	33（3）	3	6	102（3）	40

（　）は重複している住居跡数　n 地点は現在，報告書作成中。

〔川崎山遺跡周辺遺跡引用文献〕

（１）川崎山遺跡関連文献

a 地点　平岡和夫他　1979『萱田町川崎山遺跡』　八千代市遺跡調査会

b 地点　八千代市教育委員会 2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１』

c 地点　小川和博他　1999『千葉県八千代市川崎山遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』
八千代市川崎山遺跡調査会

d 地点　常松成人・川口貴明 2003『千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点』八千代市遺跡調査会

e 地点　八千代市教育委員会 1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 9 年度』

f 地点　八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 10 年度』

g 地点　八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 11 年度』

h 地点　森竜哉　2004『千葉県八千代市川崎山遺跡 h 地点』八千代市遺跡調査会

i 地点　八千代市教育委員会 2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 12 年度』

j 地点　八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』

k 地点　伊藤弘一・宮澤久史 2006『千葉県八千代市川崎山遺跡 k 地点』八千代市遺跡調査会

l 地点，n 地点については現在整理中。

1.indd 10　08.6.1 0:02:41 PM

（2）武藤健一・深谷昇 2000『千葉県八千代市上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点発掘調査報告書』
上ノ山遺跡調査会　八千代市遺跡調査会
（3）八千代市教育委員会 2002『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 13 年度』
伊藤弘一・宮澤久史 2008『千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ』八千代市教育委員会
（4）池ノ台遺跡関連文献
大賀健　他 1979『池ノ台遺跡』八千代市遺跡調査会
秋山利光　1986『池の台遺跡』八千代市教育委員会
（5）大野康男他 1991『八千代市白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター
（6）権現後遺跡関連文献
加藤修司他 1984『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター
大野康男　1994『八千代市権現後・北海道・井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター
伊藤弘一・宮澤久史 2007『千葉県八千代市　権現後遺跡―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』
八千代市教育委員会
（7）藤岡孝司他 1986『八千代市ヲサル山遺跡』（財）千葉県文化財センター
（8）阪田正一他 1985『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター
（9）藤岡孝司他 1987『八千代市井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター
(10) 大野康男　1993『八千代市坊山遺跡』（財）千葉県文化財センター
(11) 天野努　他 1974『八千代市村上遺跡群』（財）千葉県都市公社
(12) 浅間内遺跡関連文献
常松成人他 2000『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 12 年度』
八千代市教育委員会
常松成人他 2002『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 13 年度』
八千代市教育委員会
常松成人　2003『千葉県八千代市　浅間内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
常松成人　2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡発掘調査報告書　平成 18 年度』
八千代市教育委員会
中野修秀他 2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市遺跡調査会
(13) 宮澤久史他 2004『千葉県八千代市　栗谷遺跡他』八千代市遺跡調査会
(14) 朝比奈竹男他 2005『千葉県八千代市　上谷遺跡』八千代市遺跡調査会
(15) 森竜哉　　1996『仲ノ台遺跡・ヲイノ作南遺跡他発掘調査報告書』
八千代市西八千代遺跡群調査会
(16) 森竜哉　　2000『ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
(17) 大鷹依子他 1994『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他』（財）千葉県文化財センター
(18) 中野修秀他 2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市遺跡調査会
(19) 八千代市教育委員会 2005『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 16 年度』
(20) 朝比奈竹男他 1982『千葉県八千代市　高津新山遺跡』八千代市教育委員会
(21) 宮澤久史　2004『千葉県八千代市　向境遺跡』八千代市遺跡調査会
加藤修司　1998『八千代市向境遺跡』（財）千葉県文化財センター
(22) 宮澤久史　2005『千葉県八千代市　境堀遺跡』八千代市遺跡調査会

1.indd 11　08.6.1 0:02:41 PM

(23) 田中裕　他 2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 3 －八千代市間見穴遺跡－』
（財）千葉県文化財センター
(24) 新林遺跡・二重堀遺跡・黒沢池上遺跡関連文献
八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 14 年度』
森竜哉　他 2003『千葉県八千代　市黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
小川和博他 2007『二重堀遺跡・新林遺跡』八千代市二重堀遺跡調査会・八千代市新林遺跡調査会
(25) 伊藤弘一・宮澤久史 2008『千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ』八千代市教育委員会
(26) (15) に同じ。
(27) 落合章雄他 1989『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』（財）千葉県文化財センター
(28) 内野南遺跡関連文献
a 地点　常松成人　2000『内野南遺跡』八千代市遺跡調査会
b 地点　八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
c 地点　八千代市教育委員会 2004『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』
(29) (24) に同じ。
(30) (24) に同じ。
(31) 森竜哉　　2000『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
(32) 八千代市史編さん委員会 1991『八千代市の歴史　原始・古代・中世』
(33) (32) に同じ。
(34) 伊藤弘一・森竜哉 2004『高津館跡 b 地点・本郷台遺跡』八千代市教育委員会
(35) 常松成人　2004『新東原遺跡 a 地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
(36) 逆水遺跡関連文献
八千代市教育委員会 1996『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 8 年度』
八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 14 年度』
八千代市教育委員会 2004『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 15 年度』
八千代市教育委員会 2007『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成 18 年度』
伊藤弘一・宮澤久史 2008『千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ』八千代市教育委員会
(37) 八千代市教育委員会 1995『平成 6 年度八千代市埋蔵文化財調査年報』
(38) 八千代市教育委員会 1997『八千代市埋蔵文化財調査年報－平成 7 年度版－』
(39) 佐藤克己他 1980『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会』
藤原均　他 1984『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会』
(40) (13) と同じ。
(41) 増田誠蔵他 1975『おおびた遺跡』おおびた遺跡調査団・八千代市教育委員会
(42) 林勝則　　1986『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会
田中裕　他 2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 2 －八千代市道地遺跡－』
（財）千葉県文化財センター
(43) 秋山利光　2007『千葉県八千代市　勝田大作遺跡』八千代市遺跡調査会
(44) 森竜哉　他 2001『千葉県八千代市　内込遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
森竜哉　他 2003『千葉県八千代市　内込遺跡 b 地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
(45) 常松成人　2001『千葉県八千代市　平戸台 2 号墳』八千代市教育委員会

1.indd 12　　08.6.1 0:02:42 PM

(46) 秋山利光他 2002『千葉県八千代市　市内出土人骨分析委託報告書　堰場台古墳　真木野古墳』
八千代市教育委員会
(47) (32) と同じ。
(48) (32) と同じ。
(49) 糸川道行　2004『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』
（財）千葉県文化財センター
(50) 田形孝一他 1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書－印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡－』
（財）千葉県文化財センター
(51) 伊藤弘一　2005『前戸遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
(52) (32) と同じ。
(53) (34) と同じ。
(54) 森竜哉　　2003『作山遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
(55) (32) と同じ。
(56) 八千代市教育委員会 2005『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』
(57) (32) と同じ。
(58) (11) と同じ。
(59) (11) と同じ。
(60) 高津新田野馬堀遺跡関連文献
常松成人　2007『千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡ｈ地点』八千代市遺跡調査会
伊藤弘一・宮澤久史 2008『千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ』八千代市教育委員会
(61) (32) と同じ。
(62) (32) と同じ。
(63) (32) と同じ。

1.indd 13　08.6.1 0:02:42 PM

第２章　　調査された遺構と遺物

第１節　縄文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は，中期阿玉台式期の竪穴住居跡４軒と竪穴状遺構１基，陥穴１基，土坑５基である。出土遺物は，竪穴住居跡出土の中期阿玉台式土器を中心に，土坑などから早期沈線文系土器が少量出土した。ごく少量であるが前期土器も出土している。以下，竪穴住居跡，竪穴状遺構，陥穴，土坑，その他遺構外出土土器の順で報告する。

１．００４Ｄ（第６図，第７図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し，調査区西側に所在し，００５Ｄと重複している。

遺　　構　長軸（東西）6.84m×短軸（南北）5.30m。深さ0.15mの不整形の竪穴住居跡である。床はソフトロームのやや軟弱な床で平坦である。壁もロームの壁でなだらかに立ち上がる。きっちりとした掘り込みは無く，全体的になだらかに窪められた状況であった。

付属施設　壁際に小穴列を検出し柱穴と考えられる。何れも浅い窪み状のピットであった。周溝は検出されなかった。Ｐ１は，明瞭な焼土層や火床は検出されなかったものの，炉と考えられる。一部を撹乱により壊されているが，床面を掘りくぼめた楕円形の地床炉である。住居跡西壁付近に小穴２基（Ｐ２，Ｐ３）を検出しているが，住居跡に伴うものか不明。Ｐ２，Ｐ３ともなだらかに掘り窪められたピットで，遺物は出土していない。

覆　　土　基本３層に分層され，自然堆積による埋没が想定される。

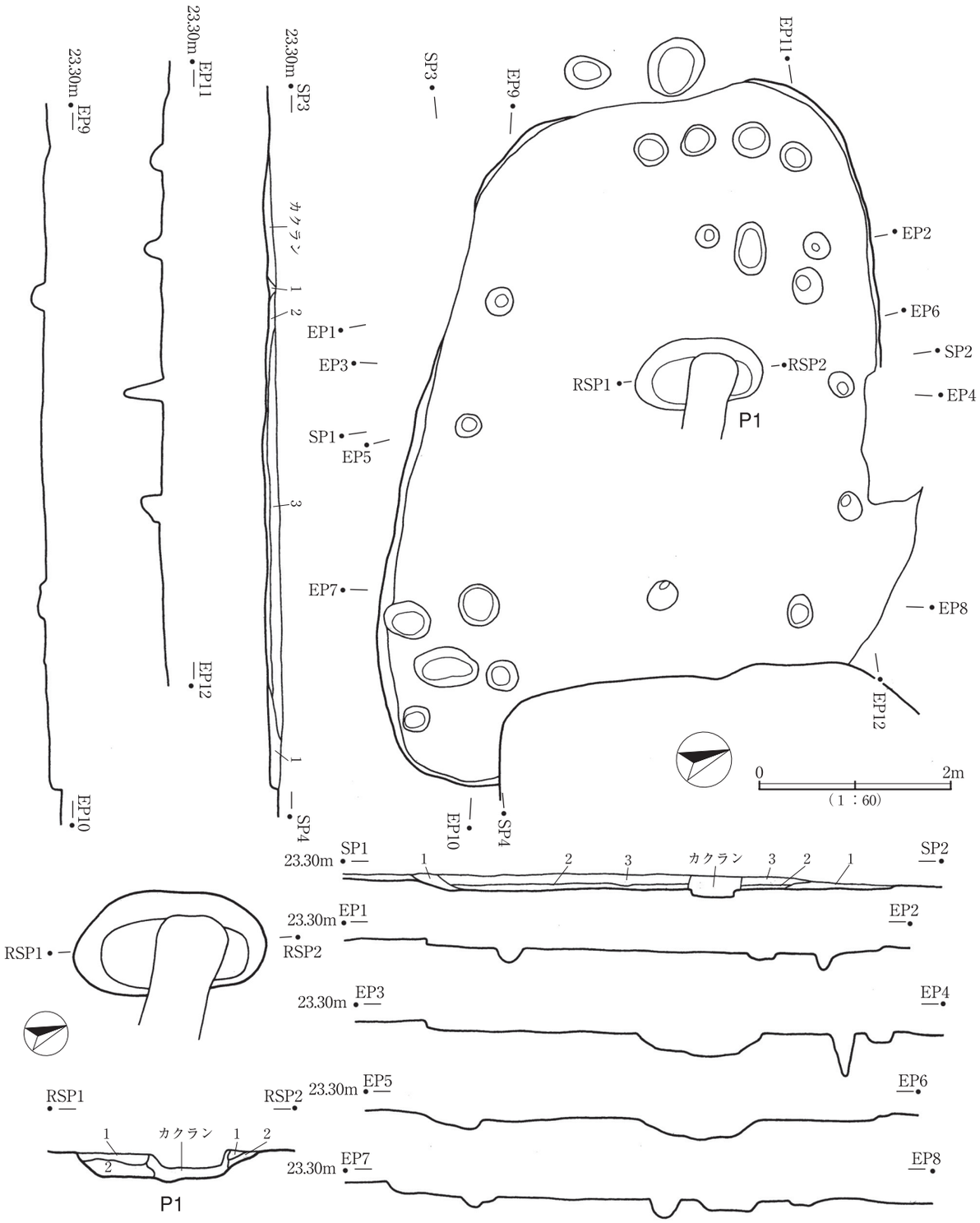
遺　　物　住居全体の覆土上層から出土がほとんどで少破片を中心に少量出土した。

１～４は何れも縄文時代中期，阿玉台式土器である。１は，深鉢口縁片で，１列の角押文を施し，内面に稜を持つ。橙褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。２も，深鉢口縁片で波状を呈する。１列の角押文を施し，内面に稜を持ち，磨きが施されている。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の長石，石英，雲母，を含む。３は，深鉢胴部片で，暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の長石，石英，微量の雲母を含む。４は，深鉢の口縁付近で，外面は沈線による区画を施す。内面は，磨きが施されている。色調は暗褐色で，焼成は良好である。胎土に微量の長石，石英，雲母を含む。

また，覆土中から黒曜石の石鏃片が１点出土した。

所　　見　出土遺物から阿玉台式Ｉａ～Ｉｂ期の竪穴住居跡と判断した。重複する００５Ｄとの新旧関係は明らかにしえなかった。

2.indd 1　　08.6.1 0:06:52 PM

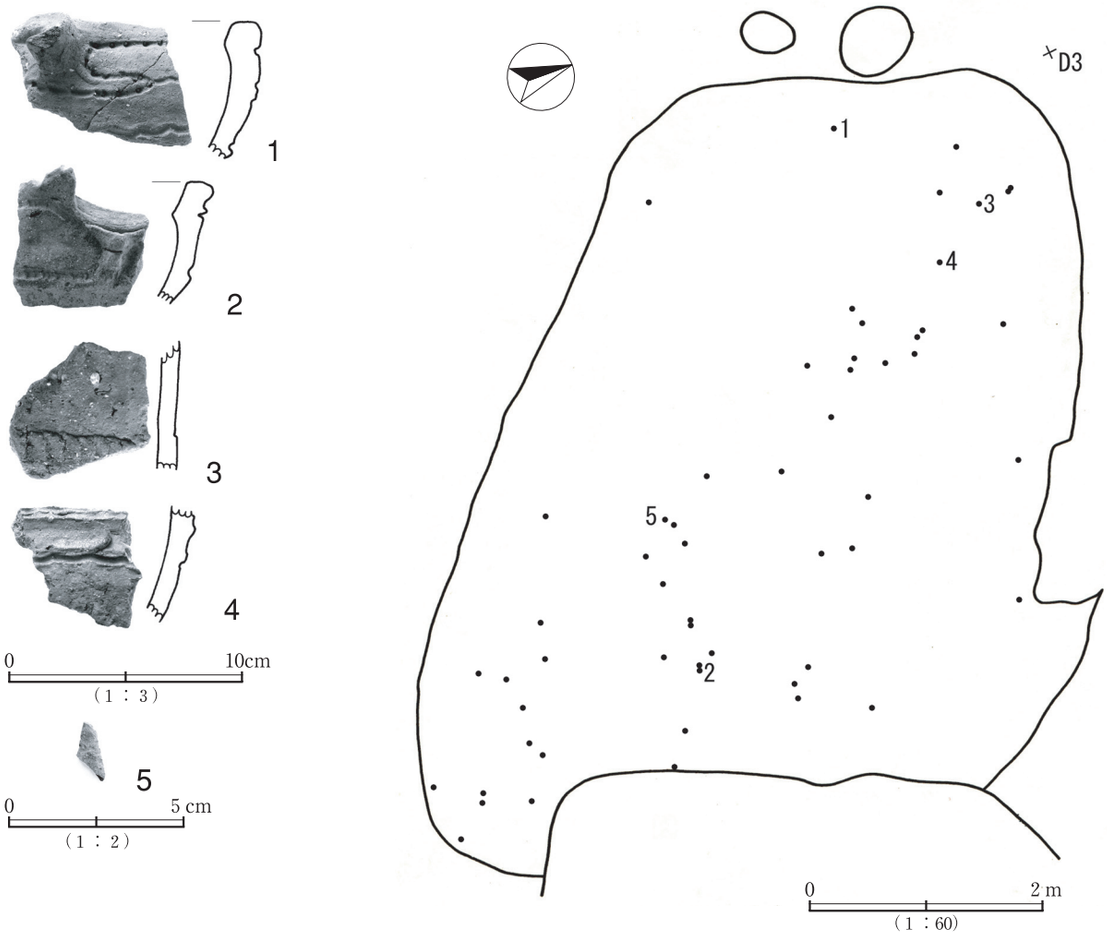


1　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量のロームが粒状にまざり、微量の褐色土も全体にまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい
2　暗黄褐色土層
ロームを主体に、少量の暗褐色土と少量のロームがまざる
粘性　ややあり　　しまり　よわい

1　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が全体的ににじむように混る
粘性　よわい　　しまり　よわい
2　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量のロームがにじむようにまざる。１層より明るい
粘性　よわい　　しまり　よわい
3　暗黄褐色土層
暗褐色土を主体としながらも少量の暗褐色土がにじむように混る
粘性　よわい　　しまり　よわい

第６図　００４Ｄ（１）

2.indd 2　　08.6.1 0:07:09 PM



第７図　００４Ｄ（２）

２．００５Ｄ（第８図，第９図）

検出地区　Ｄ－３Ｇに位置し，調査区中央に所在し００４Ｄと重複している。付近には００６Ｄがある。

遺　　構　長軸（東西）7.13 m×短軸（南北）6.40 m。深さ 0.08 mの不整形の竪穴住居跡である。床は，ソフトロームのやや軟弱な床で平坦である。壁もロームの壁でなだらかに立ち上がる。きっちりとした掘り込みは無く，全体的になだらかに窪められた状況であった。

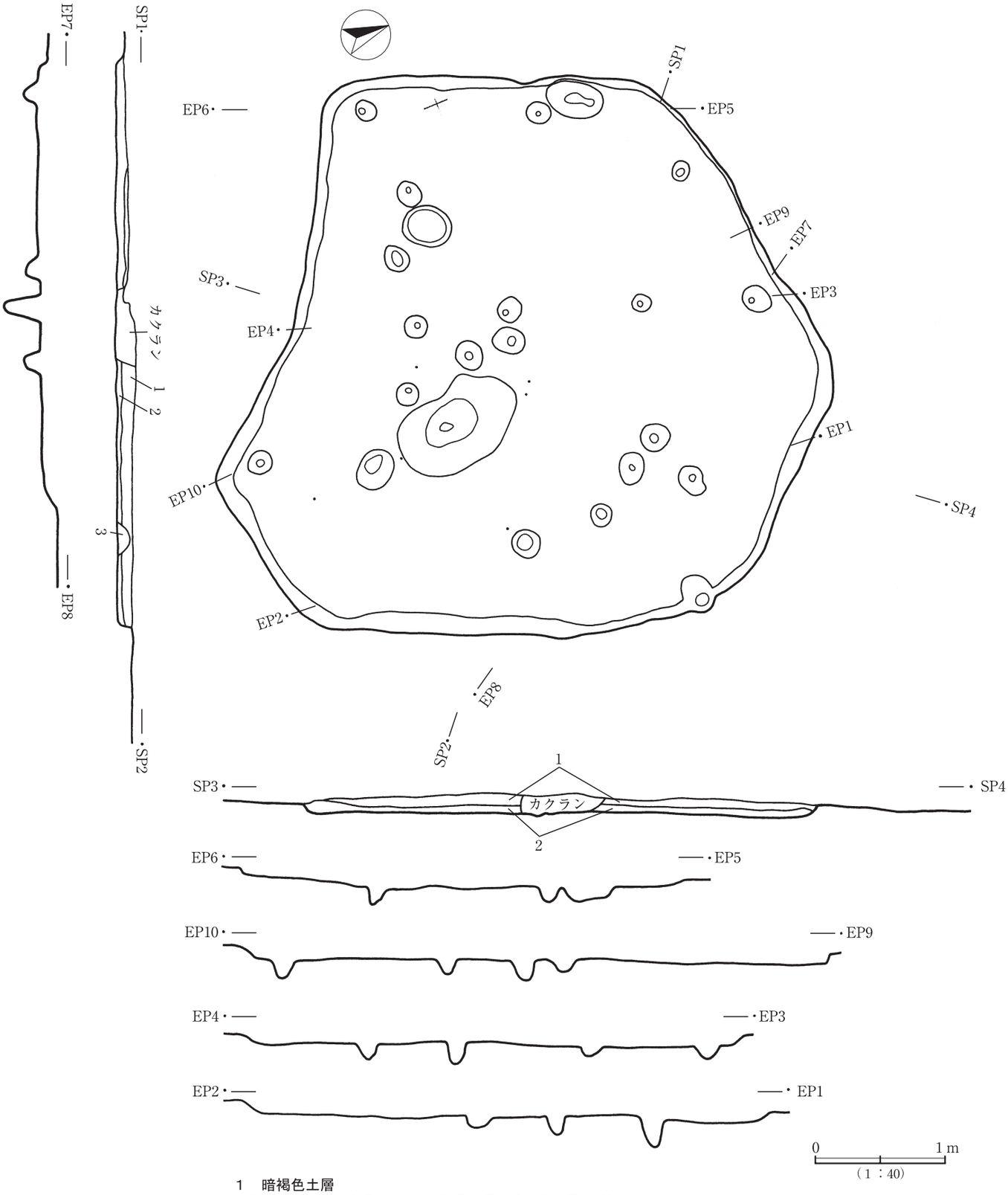
付属施設　壁際に小穴列を検出し柱穴と考えられる。周溝は検出されなかった。Ｐ１は，明瞭な焼土層や火床は検出されなかったものの覆土中に僅かに焼土が混ざっていたことから，炉と判断した。

覆　　土　基本３層に分層され，自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　住居全体の覆土上層から出土がほとんどで少破片を中心に少量出土した。

１～９は，何れも縄文時代，中期阿玉台式土器である。１は，深鉢口縁片で波状を呈する。波頂部に刻みを施し，以外の口唇は角押文１列を施す。外面の微隆起に添って両側に１列の角押文を施す。内面に稜をもち，磨きが施されている。橙褐色で焼成は良好である。胎土に雲母を含む。２も，深鉢口縁片で波状を呈する。口唇に１列の角押文を施し，外面は微隆起に添って両側に１列の角押文を施す。内面に稜をもち，磨きが施されている。橙褐色で焼成は良好である。胎土に雲母を含む。１と同一個体と考えられる。３も深鉢口縁片で波状を呈する。口唇は平坦で外傾した状態である。外面は微隆起帯に添って角押文一列を施す。内面に稜を持ち，更に彫刻文がある。橙褐色で焼成は良好である。胎土に雲母少量をを含む。４は，深鉢の口縁片で波状を呈する。波頂部に刻み１箇所を施す。口唇は平坦で外傾している。外面に角押文１

2.indd 3　08.6.1 0:07:21 PM

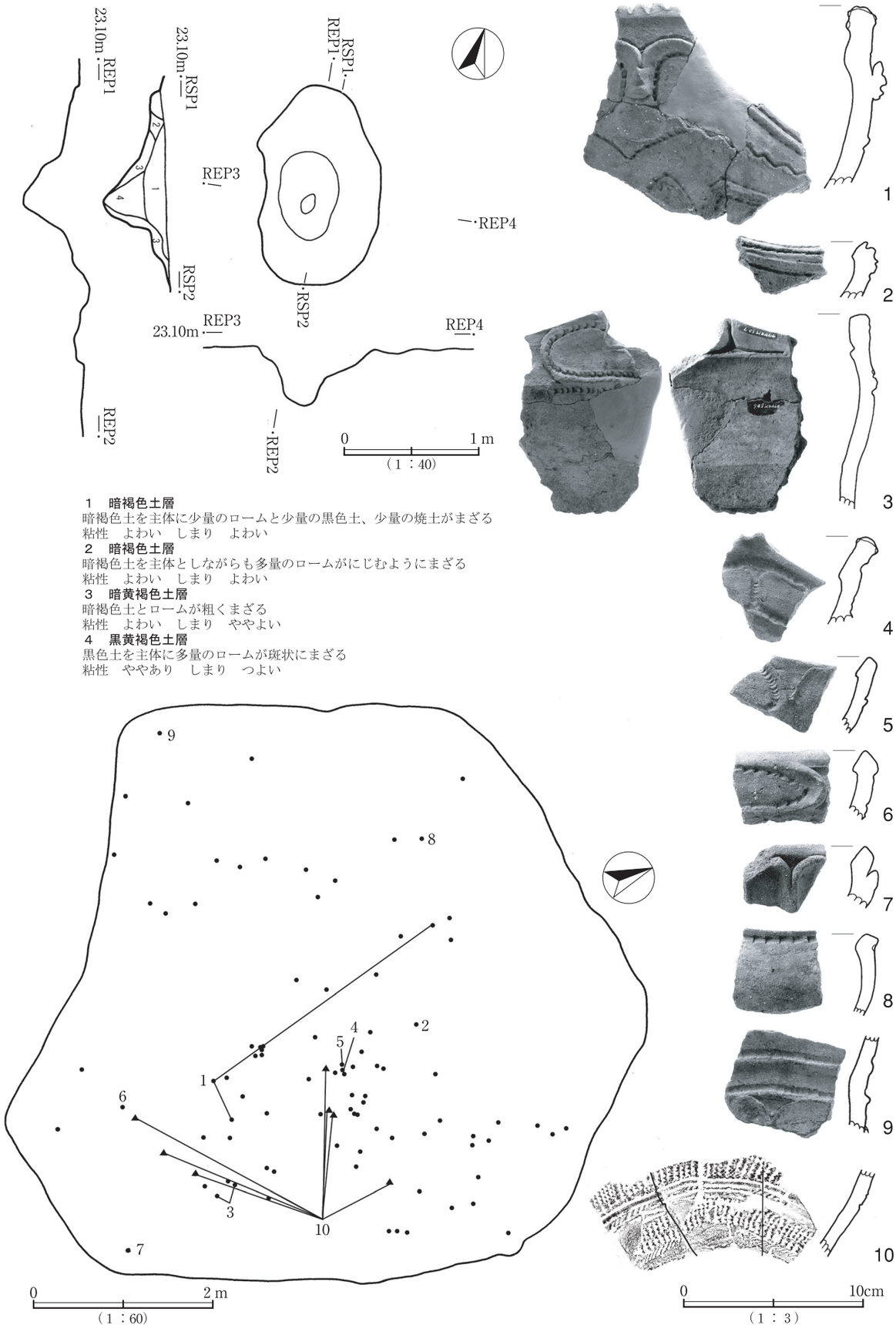


1　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量のローム、微量の黒色土が混る層　粘性　よわい　しまり　よわい

2　暗黄褐色土層
ロームを主体としながらも、多量の暗褐色土が混る層　粘性　よわい　しまり　ややあり

第8図　005D（1）

2.indd 4　08.6.1 0:07:22 PM



1　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量のロームと少量の黒色土、少量の焼土がまざる
粘性　よわい　しまり　よわい
2　暗褐色土層
暗褐色土を主体としながらも多量のロームがにじむようにまざる
粘性　よわい　しまり　よわい
3　暗黄褐色土層
暗褐色土とロームが粗くまざる
粘性　よわい　しまり　ややよい
4　黒黄褐色土層
黒色土を主体に多量のロームが斑状にまざる
粘性　ややあり　しまり　つよい

第9図　005D（2）

2.indd 5　08.6.1 0:07:43 PM

列を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の長石を含む。５も，深鉢の口縁片で波状を呈する。口唇は平坦で外傾している。外面に角押文１列を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の長石を含む。４と同一個体と考えられる。６は，深鉢の口縁片。尖頭状の口唇で，外面は微隆起の内側に角押文１列を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。７は，深鉢の口縁片。口唇は平坦で外傾している。口唇直下に角押文１列を施す。内面に稜を持つ。色調は，外面が暗褐色で内面が褐色である。焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。８は，深鉢の口縁片。尖頭状の口唇で，外面は微隆起を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。９は深鉢の口縁部付近。外面は微隆起を施し，微隆起に添って角押文１列を配し，さらにその下に角押文１列を配している。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。

10は前期興津式土器の深鉢底部付近である。外面は垂直刺突貝殻文を施し更に幅広の浅い平行沈線２条を横走させている。色調は橙褐色で焼成は良好である。胎土に白色微粒子を含む。

所　　見　出土遺物から阿玉台式Ｉａ～Ｉｂ期の竪穴住居跡と判断した。覆土中から前期，興津式土器が出土していることと住居跡の平面形から２軒の重複も考えられる。重複する００４Ｄとの新旧関係も明らかにしえなかった。

３．００６Ｄ（第10図）

検出地区　Ｅ－３Ｇに位置し，調査区中央に所在し，西側に００５Ｄが所在する。

遺　　構　長軸（東西）5.22m×短軸（南北）4.38m。深さ0.14mの不整形の竪穴住居跡である。床はソフトロームのやや軟弱な床で平坦である。壁もロームの壁でなだらかに立ち上がる。きっちりとした掘り込みは無く，全体的になだらかに窪められた状況であった。

付属施設　床面に小穴を６基検出した。何れも浅い窪み状のピットであった。周溝は検出されなかった。Ｐ１～Ｐ３は，位置，形態から柱穴と考えられる。Ｐ４～Ｐ６は炉その他の施設と考えられるが，用途は不明である。

覆　　土　基本３層に分層され，自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　住居全体の覆土上層から出土がほとんどで少破片を中心に少量出土した。

１は，縄文時代中期，阿玉台式土器である。深鉢口縁片で，１列の角押文を施し，内面に稜を持つ。橙褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。

所　　見　出土遺物から阿玉台式Ｉａ～Ｉｂ期の竪穴住居跡と判断した。

４．００７Ｄ（第11図，第12図，第13図）

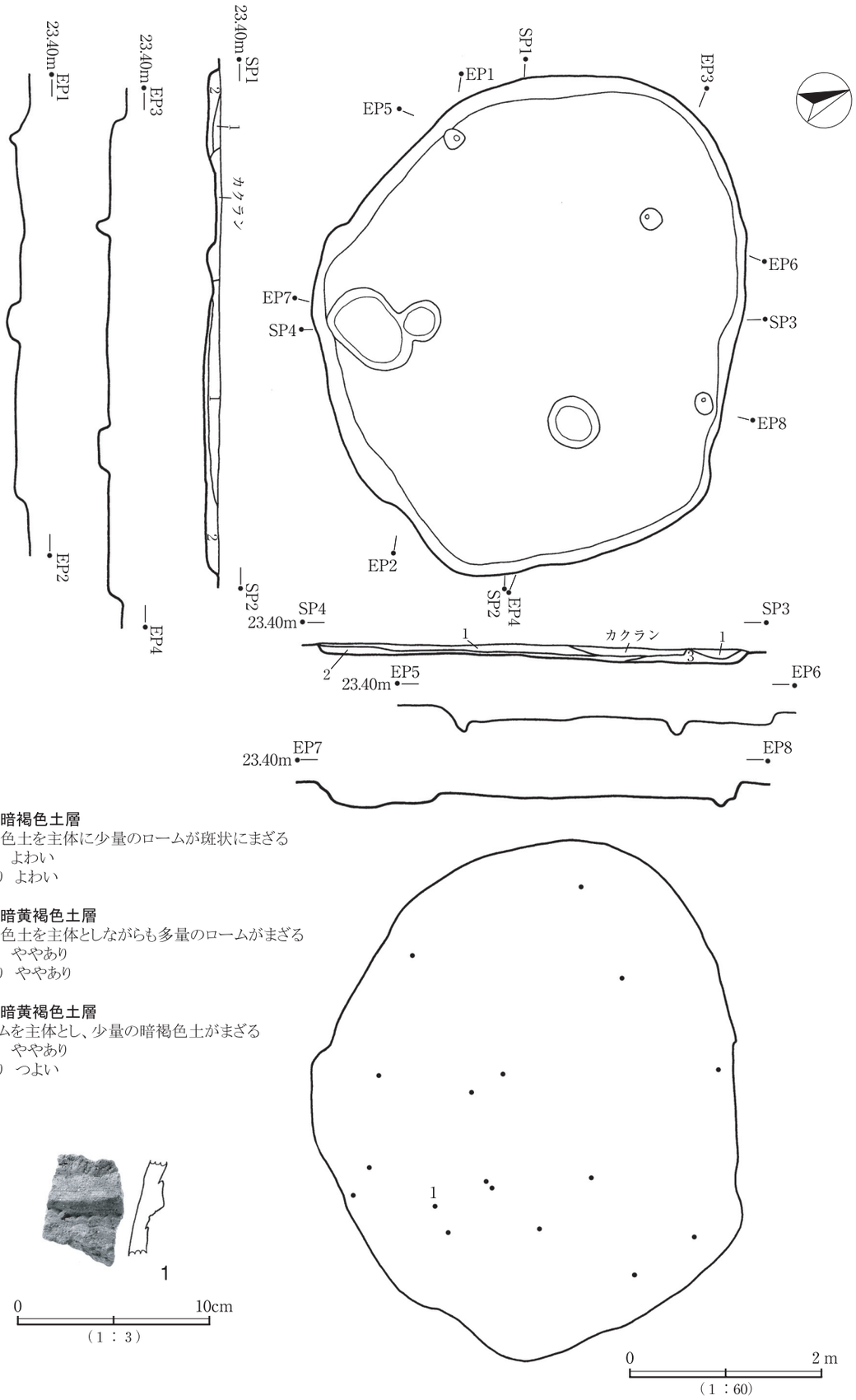
検出地区　Ｅ－２Ｇに位置し，調査区北側に所在し００８Ｐ，００９Ｐ，０１０Ｐと重複している。

遺　　構　長軸（東西）7.93 m×短軸（南北）6.24 m。深さ 0.18 mの不整形の竪穴住居跡である。床は，ソフトロームのやや軟弱な床で平坦である。壁もロームの壁でなだらかに立ち上がる。きっちりとした掘り込みは無く，全体的になだらかに掘り窪められた状況であった。

付属施設　壁際に小穴列を検出し柱穴と考えられる。Ｐ１は位置的には炉と考えたいが，焼土や火床を検出することはできなかった。周溝は検出されなかった。

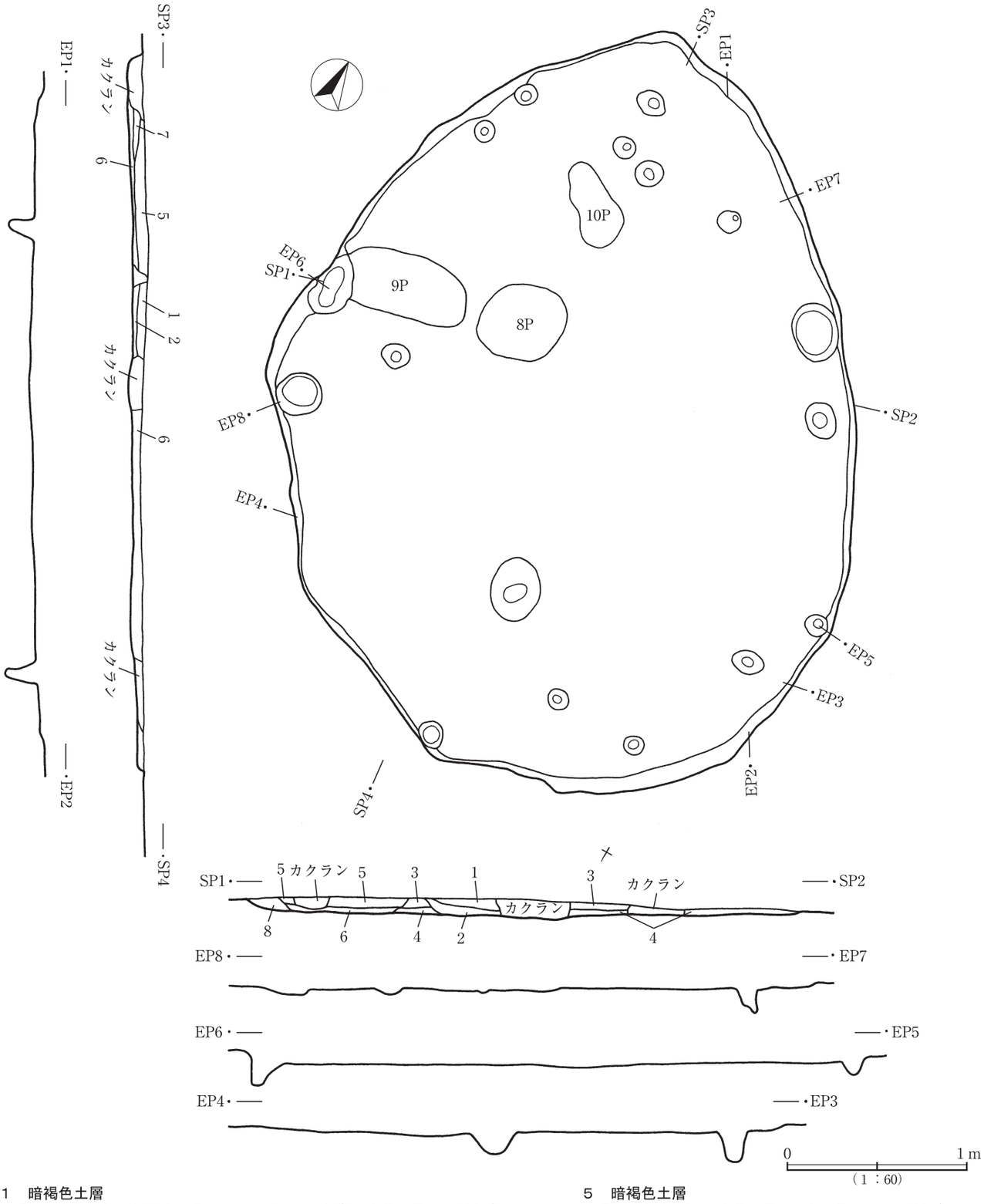
覆　　土　８層に分層され，概ね自然堆積による埋没と考えられるが，いくつかの遺構の重複が想定される。

2.indd 6　08.6.1 0:07:43 PM



第10図　００６Ｄ

2.indd 7　08.6.1 0:08:00 PM



1　暗褐色土層
暗褐色土を主体としながらも多量のロームが斑状にまざり、少量の黒色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

2　暗褐色土層
暗褐色土を主体としながらも、多量の黒色土がまざり、少量のロームが斑状にまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

3　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、少量のロームと少量の黒色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

4　暗黄褐色土層
暗褐色土を主体としながらも多量のロームと少量の黒色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

5　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、少量の黒色土と微量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

6　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、少量のロームと微量の黒色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

7　暗黄褐色土層
ロームを主体と少量の暗褐色土と微量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

8　暗黄褐色土層
ロームを主体と少量の暗褐色土と微量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　ややあり

第11図　００７Ｄ（１）

2.indd 8　　08.6.1 0:08:01 PM

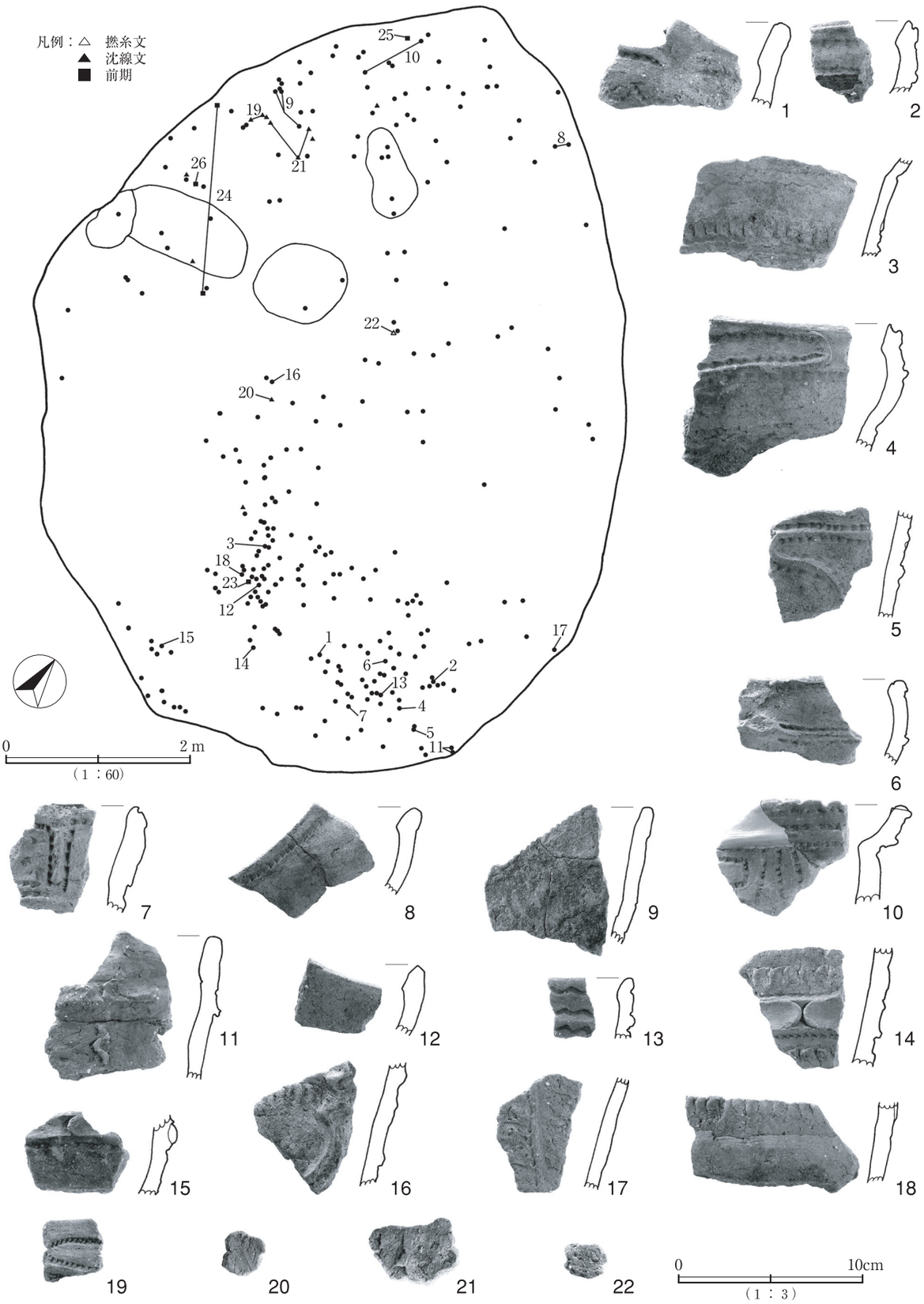
遺　　物　住居全体の覆土上層からの出土がほとんどで少破片を中心に出土した。遺物の集中地点が住居跡北側と南側と２ヶ所に分かれる。

１～18は，何れも縄文時代，中期阿玉台式土器である。１は，深鉢口縁片で波状を呈する。波頂部に角押文１列を施す。外面は，一部剥離しているが，１列の角押文を施す。内面に稜をもち，磨きが施されている。暗褐色で焼成は良好である。胎土に雲母を含む。２は，深鉢口縁片で１同様，口唇に１列の角押文を施し，外面は微隆起に添って内側に１列の角押文を施す。内面に稜をもち，磨きが施されている。橙褐色で焼成は良好である。胎土に雲母微量を含む。３は，深鉢口縁付近で，外面は微隆起帯に添って角押文一列を施す。暗褐色で焼成は良好である。胎土に雲母少量を含む。４は，深鉢の口縁片で平坦で内湾している。口唇は１列の角押文を施し，外面は微隆起に添って両側に１列の角押文を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の長石を含む。５は，深鉢の胴部片で，外面は，微隆起が蛇行して垂下して，微隆起に添って両側に角押文が１列を施こされている。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。６は，深鉢の口縁片。平坦で内湾している。外面は微隆起の両側に角押文１列を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。７は，深鉢の口縁片。口唇は平坦で１列の角押文を施し，口唇直下に角押文１列を施す。垂下する微隆起の両側に角押文１列を施す。色調は，外面が橙褐色で内面が暗褐色で，焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。８は，深鉢の口縁片で波状を呈する。口唇直下に角押文１列を施す。内面に稜を持つ。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。９は深鉢の口縁片で，口唇に刻みを施す。黒褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。10は，深鉢の口縁片で，口唇に刻みを施す。口唇直下に角押文１列を施し，更に下部に横走する微隆起に添って両側に角押文１列を施す。黒褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。11は，深鉢の口縁片で波状を呈する。沈線と微隆起による区画を施す。暗褐色で焼成は良好である。胎土に少量の雲母，長石を含む。12は，深鉢の口縁片で波状を呈する。無文で内面に稜をもつ。橙褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母を含む。13は，深鉢の口縁片で平縁である。S字状の沈線が３条横走する。色調は，外面が橙褐色で内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。14は，深鉢胴部片で横走りする微隆起の外側に１列の角押文を施す。橙褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。15は，深鉢胴部片で横走する微隆起の外側に１列の角押文を施す。黒褐色で焼成は良好である。胎土に雲母を多く含む。16は，深鉢胴部片で蛇行しながら垂下する微隆起に添って角押文１列を施す。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。17も深鉢胴部片で，蛇行しながら垂下する微隆起に添って角押文1列を施す。橙褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。18は，深鉢胴部片で輪積痕を残す。暗褐色で焼成は良好である。胎土に微量の雲母，長石を含む。

19～22は，深鉢胴部片を利用した土器片錘である。19に角押文１列が見えることから，これらの土器片錘は，１～18までの時期とほぼ同時期の所産と考えられる。

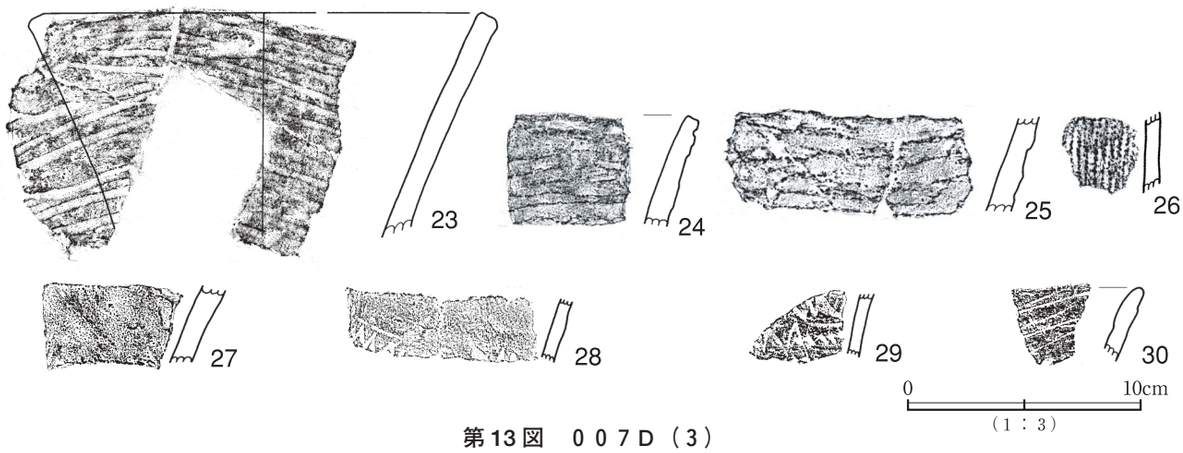
23～26は，早期の土器群である。23は，深鉢口縁である。口唇は角頭で僅かに外反する。浅く太い沈線が横走する。淡褐色で焼成は良好である。胎土にチャート等の小角礫を少量含む。24も深鉢口縁である。口唇は角頭で僅かに外反する。外面は，横方向の粗い擦痕を施し，施文効果として凹線気味となる。内面は，磨きが施されている。淡褐色で焼成は良好である。胎土にチャート等の小角礫を多量に含む。25は，深鉢胴部片で，24同様，横方向の粗い擦痕を施

2.indd 9　　08.6.1 0:08:01 PM



第12図　００７Ｄ（２）

2.indd 10
08.6.1 0:08:35 PM



第13図　００７Ｄ（３）

し，施文効果として凹線気味となる。内面は，磨きが施されている。淡褐色で焼成は良好である。胎土にチャート等の小角礫を多量に含む。以上23～25は，初期沈線文の竹ノ内式段階の所産と考えられる。26は，撚糸文系土器で，夏島式の縄文タイプと思われる。淡褐色で焼成は良好である。白色微砂粒少量を含む。

27から30は，前期土器群で浮島式から興津式に相当する。27は，深鉢の胴部で無文，擦痕系の土器である。橙褐色で焼成は良好である。28は，深鉢の胴部で，外面に貝殻によるコンパス文を施している。橙褐色で焼成は良好である。29は，深鉢の胴部で，外面に貝殻によるコンパス文と刺突を施している。橙褐色で焼成は良好である。30は，深鉢の口縁部でやや外反する。外面に横走する細沈線を施す。橙褐色で焼成は良好である。

所　　見　出土遺物から阿玉台式Ｉａ～Ｉｂ期の竪穴住居跡と判断した。遺物の集中区が２ヶ所になること，土層断面の観察，覆土中から早期，沈線文系土器や中期初頭土器も出土していること，また，その出土状況などから住居跡北側は早期，中期初頭の遺構群が存在し，その後，南側に本住居跡が構築されたと考えるのが妥当か思われる。

５．００１Ｉ（第14図）

検出地区　Ｃ－５Ｇに位置し，調査区南側に所在する。

遺　　構　長軸2.82ｍ×短軸2.50ｍの不整形の遺構で，深さは，0.28ｍである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

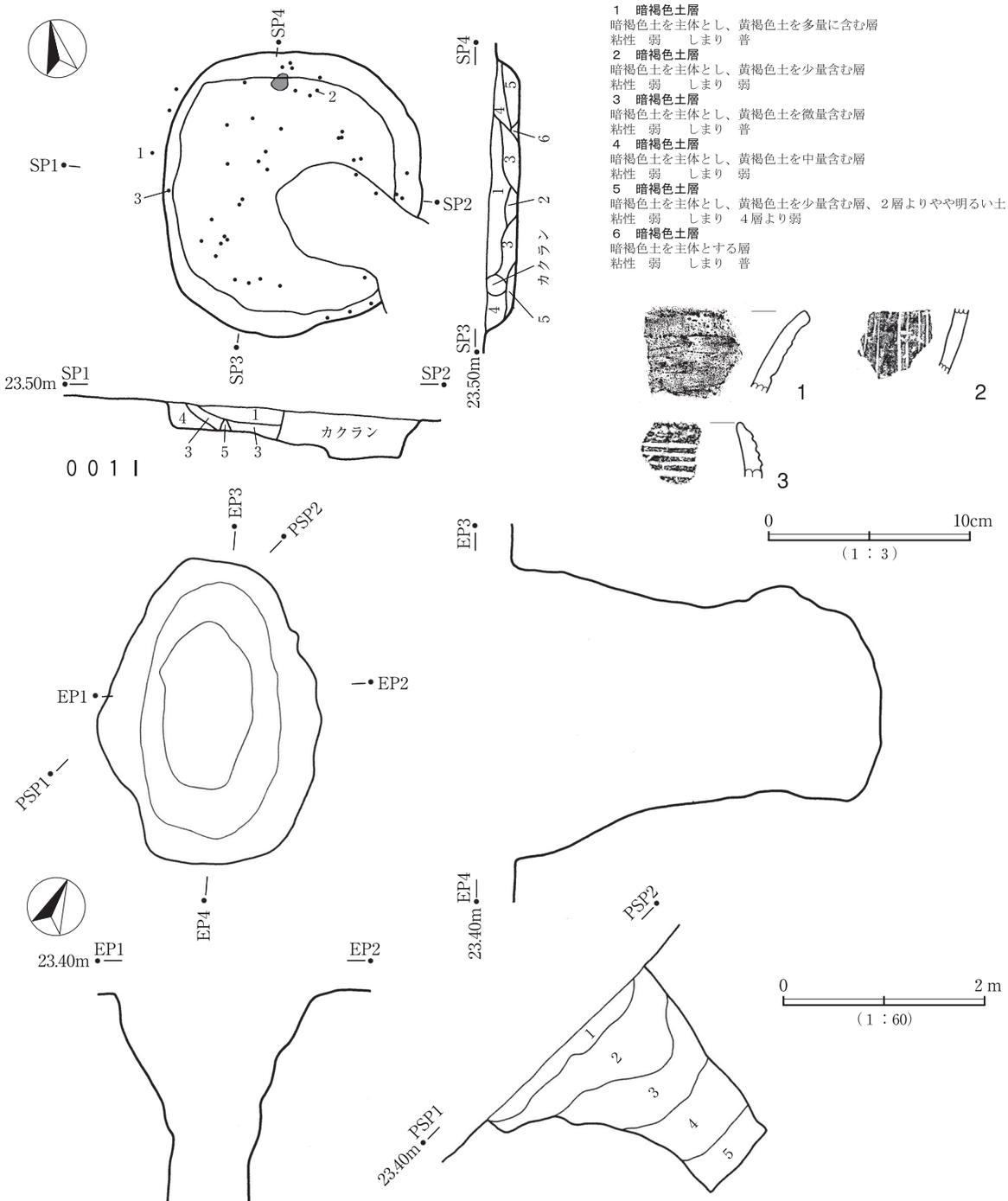
覆　　土　黒褐色土系の覆土を中心に，基本５層に分層され，土層断面の観察からは２基の土坑の重複が想定される。覆土上層から部分的に焼土を検出している。

遺　　物　覆土上層を中心に小片が少量出土。また，焼礫が比較的多く出土した。

１～３は，何れも縄文土器である。１は，早期沈線文系土器，深鉢の口縁片である。口唇は角頭気味，外面は横走する擦痕が顕著で，施文効果として凹線気味となる。淡褐色で焼成は良好。胎土にチャート等の小角礫を多く含む。竹之内式段階の所産と判断した。２は，深鉢胴部片で，２条１組の縦位の条線を施す。内面は丁寧な磨きが施されている。橙褐色で焼成は良好。３は深鉢口縁片で，外面に沈線が横走りする。灰褐色で焼成はおおむね良好。白色砂粒少量を含む。中期五領ヶ台式と判断した。

所　　見　出土遺物，土層の観察等から，縄文早期の遺構と中期初頭の土坑の重複と判断した。ただし，時期，用途については，尚検討の余地がある。

2.indd 11　08.6.1 0:08:39 PM



1　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を多量に含む層
粘性　弱　　しまり　普
2　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を少量含む層
粘性　弱　　しまり　弱
3　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を微量含む層
粘性　弱　　しまり　普
4　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を中量含む層
粘性　弱　　しまり　弱
5　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を少量含む層、２層よりやや明るい土
粘性　弱　　しまり　４層より弱
6　暗褐色土層
暗褐色土を主体とする層
粘性　弱　　しまり　普

1　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を多量に含む層
粘性　弱　　しまり　普
2　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を少量含む層
粘性　弱　　しまり　弱
3　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を微量含む層
粘性　弱　　しまり　普
4　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を中量含む層
粘性　弱　　しまり　弱
5　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土を少量含む層、２層よりやや明るい土
粘性　弱　　しまり　４層より弱
6　黒褐色土層
黒褐色土を主体とし、黄褐色土が少量粗く混ざる層
粘性　弱　　しまり　弱
7　黒褐色土層
黒褐色土を主体とし、黄褐色土が中量混ざる層、ロームブロック多数、６層よりしまる
粘性　弱　　しまり　弱
8　暗褐色土層
暗褐色土を主体とする層、非常に強くしまりがある
粘性　普　　しまり　強

第14図　００１Ｉ，００６Ｐ

2.indd 12　　08.6.1 0:08:50 PM

６．００６Ｐ（第14図）

検出地区　Ｅ－４Ｇに位置し，調査区南側に所在する。

遺　　構　長軸2.00ｍ×短軸1.44ｍの楕円の陥穴で，深さは2.46ｍである。坑底は長軸1.10ｍ×短軸0.57ｍの楕円であった。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がり，漏斗状に広がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。２，３，４層は人為的な埋め戻しと考えられ，1層は自然堆積と考えられる。

遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形状，規模，覆土の観察から縄文時代の縄文時代の陥穴と判断した。

７．００７Ｐ（第15図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し，調査区西側に所在する。

遺　　構　長軸1.13ｍ×短軸1.09ｍの不整形の土坑で，深さは，0.27ｍである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。坑底に小穴１基を検出した。

覆　　土　３層に分層され，おおむね自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　覆土中から小片を中心に少量出土。

１は，縄文土器，深鉢の頸部付近である。Ｓ字状の沈線が横走する。灰褐色で焼成は悪い。胎土に砂粒を多く含み非常に脆い。２は，縄文土器口縁片で，口唇は角頭状で平縁。口唇直下に角押文１列を施す。内面に稜をもつ。黒褐色で焼成はやや悪い。雲母少量と砂粒を含む。３も縄文土器口縁片で，口唇は角頭状で平縁。口唇直下に角押文１列を施す。内面に稜をもつ。暗褐色で焼成はやや悪い。雲母少量と砂粒少量を含む。

所　　見　出土遺物から，五領ヶ台式期～阿玉台式期の土坑と判断した。

８．００８Ｐ（第15図）

検出地区　Ｅ－２Ｇに位置し，調査区北側に所在する。

遺　　構　長軸0.92ｍ×短軸0.80ｍの不整形の土坑で，００６Ｄと重複している。坑底はロームの床で半球形であった。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　暗黄褐色土系の覆土が充填され，おおむね自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　覆土中から細片を中心に少量出土。

所　　見　出土遺物から，前期浮島～興津式期の土坑と判断した。

９．００９Ｐ（第15図）

検出地区　Ｅ－２Ｇに位置し，調査区北側に所在する。

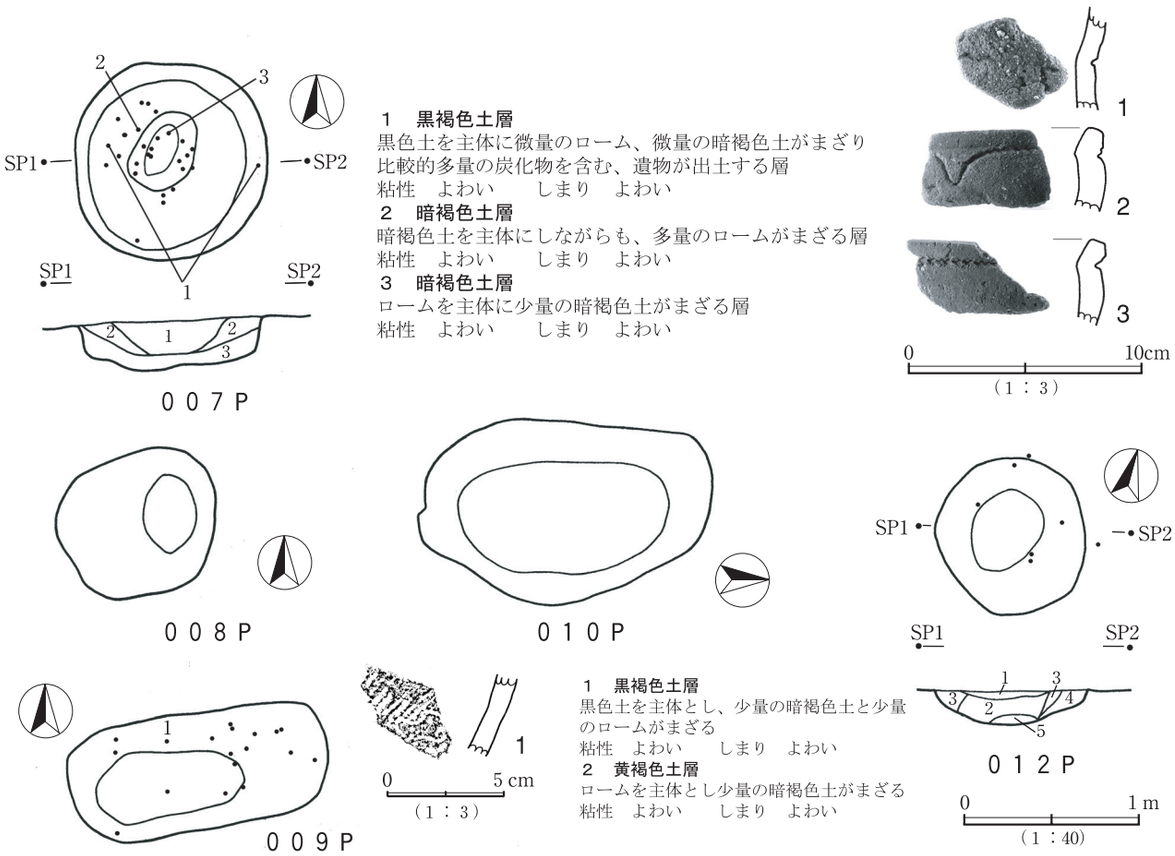
遺　　構　長軸1.46ｍ×短軸0.68ｍの不整形の土坑で，００６Ｄと重複している。坑底はロームの床で半球形であった。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　暗黄褐色土系の覆土が充填され，おおむね自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　覆土中から小片を中心に少量出土。

１は，深鉢頸部片で，地文の縄文の上にＳ字状の結節２条を施す。暗褐色で，焼成は良好。

2.indd 13　08.6.1 0:08:50 PM



第15図　007P，008P，009P，010P，012P

所　　見　出土遺物から，中期五領ヶ台式期の土坑と判断した。

10.　010P（第15図）

検出地区　E－2Gに位置し，調査区北側に所在する。

遺　　構　長軸1.62m×短軸1.06mの不整形の土坑で，006Dと重複している。坑底はロームの床で半球形であった。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　暗黄褐色土系の覆土が充填され，おおむね自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　覆土中から細片を中心に少量出土。

所　　見　出土遺物から，前期浮島～興津式期の土坑と判断した。

11.　012P（第15図）

検出地区　E－4Gに位置し，調査区中央に所在する。

遺　　構　長軸0.90m×短軸0.85mの不整形の土坑で，深さは，0.20mである。坑底はロームの底面で半球形でやや丸みをもっていた。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

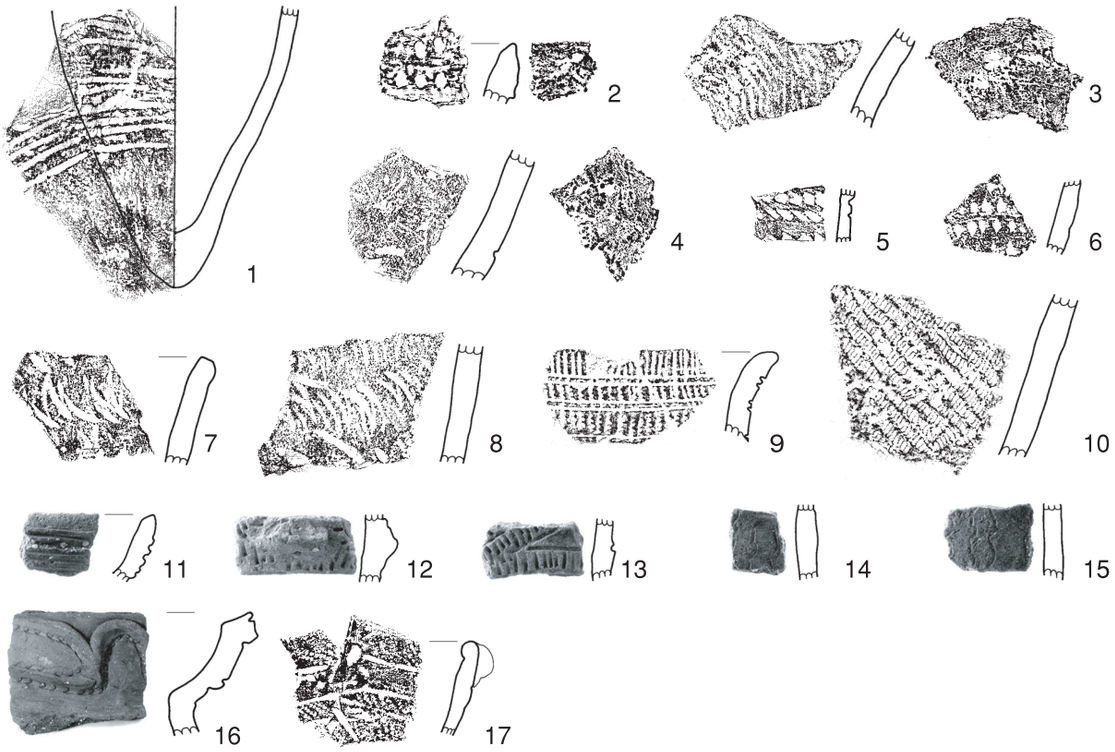
覆　　土　暗褐色土系の覆土が充填され5層に分層され，人為的な埋め戻しが想定される。

遺　　物　覆土中から細片を中心に少量出土。

所　　見　出土遺物から，五領ヶ台式期～阿玉台式期の土坑と判断した。

2.indd 14　　08.6.1 0:09:06 PM

12. 遺構外出土遺物（第 16 図）



第 16 図　遺構外出土遺物

1 は，早期沈線文系土器で深鉢鉢尖底部である。平行太沈線が施され，無文部にいたる。暗褐色で焼成は良好。田戸下層式と判断した。

2 ～ 4 は，早期条痕文系土器である。2 は，深鉢口縁部で，口唇に刻みを施し，口唇直下に 2 条の隆帯添付し隆帯にも刻みを施す。内面の条痕調整は見られない。色調は，外面が橙褐色で内面が暗褐色。焼成は良好で，繊維を少量含む。茅山下層式か。3 は，深鉢胴部で，外面は，浅い条痕を施し，内面には条痕調整は見られない。色調は暗褐色で，焼成は良好。繊維を少量含む。4 は，深鉢胴部で，外面は，浅い条痕を施し，内面には条痕調整は見られない。色調は，外面が橙褐色で内面が暗褐色。焼成は良好で，繊維を少量含む。3，4 は広義での茅山式と捉えた。

5 ～10は，前期後半の土器である。5 は，深鉢口縁付近で，三角文を重畳施文している。色調は淡褐色で，焼成は良好。緻密な胎土である。浮島Ⅲ～興津式と判断した。6 は，深鉢胴部片で三角文を重畳施文している。色調は暗褐色で，焼成は良好。緻密な胎土である。浮島Ⅲ～興津式と考えられる。7 は，深鉢口縁片で波状を呈す。口唇に刻みを施し，外面は，放射肋の無い貝殻によるロッキング施文を行う。色調は橙褐色で，焼成は良好。浮島～興津式と考えられる。8 は，深鉢胴部片で，縦位の条線文とその下位に貝殻によるコンパス文を施文する。色調は暗褐色で，焼成は良好。浮島～興津式と考えられる。

9 は，深鉢口縁片で，外面は，垂直刺突貝殻文の下位に 2 条の平行沈線文を施し，この組み合わせを重畳する。内面はケズリによる磨きを施す。色調は橙褐色で，焼成は良好。興津Ⅱ式と考えられる。10 は，深鉢胴部片で，単節ＬＲ，ＲＬによる羽状縄文を施文。色調は暗褐色で，焼成は良好。胎土に白色微粒子を多く含む。興津式と考えられる。

2.indd 15　08.6.1 0:09:16 PM

11～15は，中期初頭五領ヶ台式土器である。11は，キャリパー型深鉢の口縁で波状を呈す。口唇は内削ぎで，外面に細い隆帯を重畳させる。色調は，灰褐色で，焼成は良好。胎土に白色小礫を含む。12 は，キャリパー型深鉢の口縁付近で細い竹管状施文具による短沈線（あるいは刺突文）を施し，棒状の隆帯を横位に貼付する。色調は，灰褐色で，焼成は良好。胎土に白色小礫を含む。13 もキャリパー型深鉢の口縁付近で，沈線で区画をし区画内を直行する形で単沈線を充填している。色調は，灰褐色で，焼成は良好。胎土に白色小礫を含む。11 ～ 13 は同一固体か。14 は，キャリパー型深鉢の頸部～胴部片で沈線区画を行い，更に縦位の結節縄文を施文する。色調は，灰褐色で，焼成は良好。胎土に白色小礫を含む。15 もキャリパー型深鉢の胴部片で，縦位の結節縄文を施文する。色調は，灰褐色で，焼成は良好。胎土に白色小礫を含む。

16は，阿玉台式土器の深鉢口縁片で，口唇に角押文 1 列を配し，外面は，隆帯に沿って角押文1列を施す。内面には稜をもつ。暗褐色で焼成は良好。胎土に雲母少量を含む。

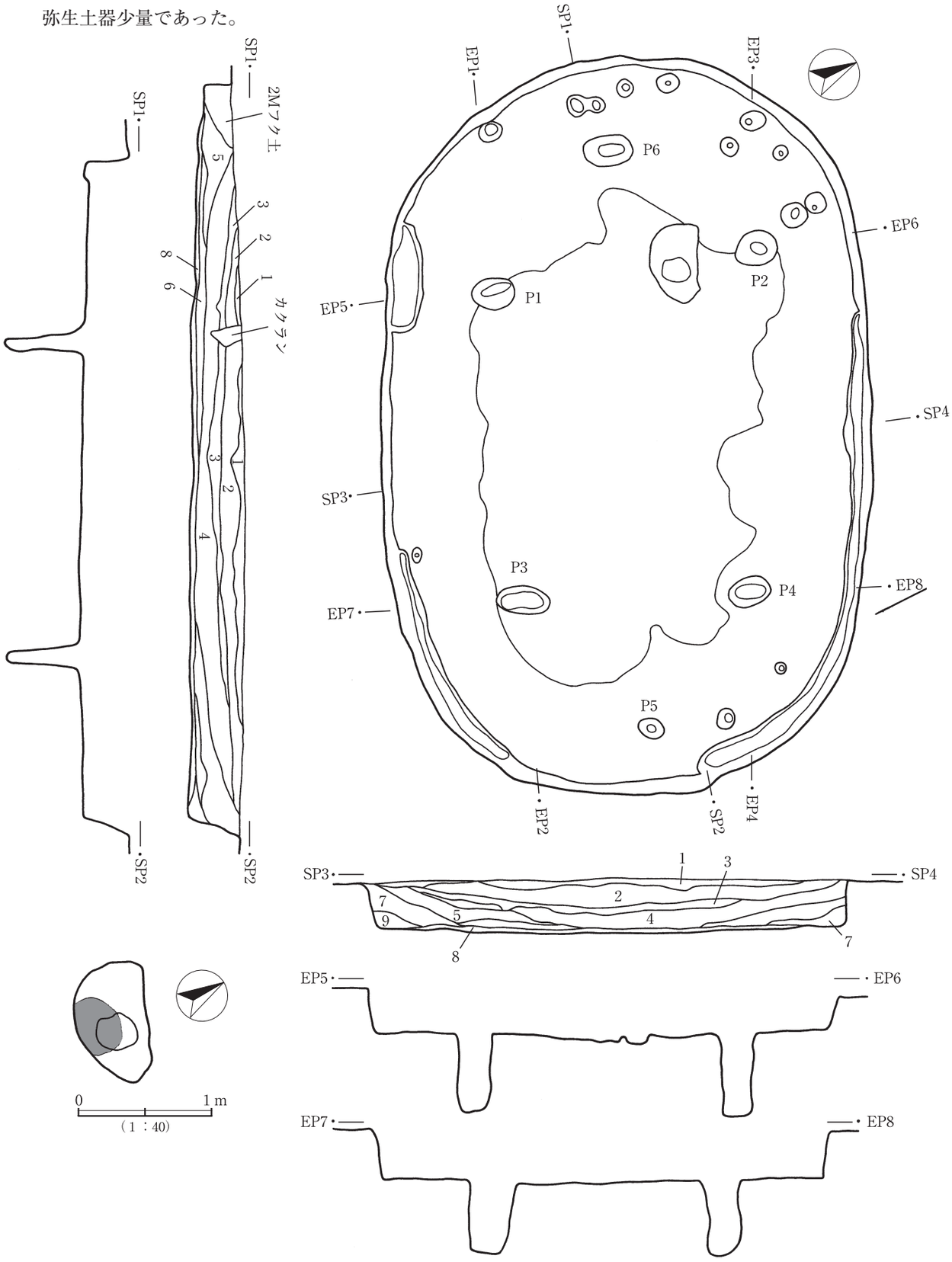
17 は，後期安行式或いは曽谷式の浅鉢の口縁片で，波状を呈する。口唇は角頭で内面は内側に屈曲する。口縁直下から RL 縄文を施し沈線で区画し，区画内は磨り消している。ひねり気味の突起を貼付する。

内面は丁寧に磨きこまれている。色調は橙褐色で，焼成は良好である。

2.indd 16 08.6.1 0:09:16 PM

第２節　弥生時代

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は，竪穴住居跡１軒のみであった。出土遺物も住居跡出土の弥生土器少量であった。



第17図　００２Ｄ（１）

2.indd 17　　08.6.1 0:09:17 PM

１　暗褐色土層
暗褐色土を主体に微量の黒色土がまざる層に多量の焼土(上層焼土)を含む
粘性　よわい　　しまり　よわい

２　黒褐色土層
黒色土を主体に少量の暗褐色土と微量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

３　黒赤褐色土層
黒褐色土を主体としながらも多量の暗褐色土と微量のロームがまざる層に多量の焼土(下層焼土)を含む
粘性　よわい　　しまり　よわい

４　黒色土層
黒色土を主体に少量のロームと微量の暗褐色土を含む
粘性　よわい　　しまり　よわい

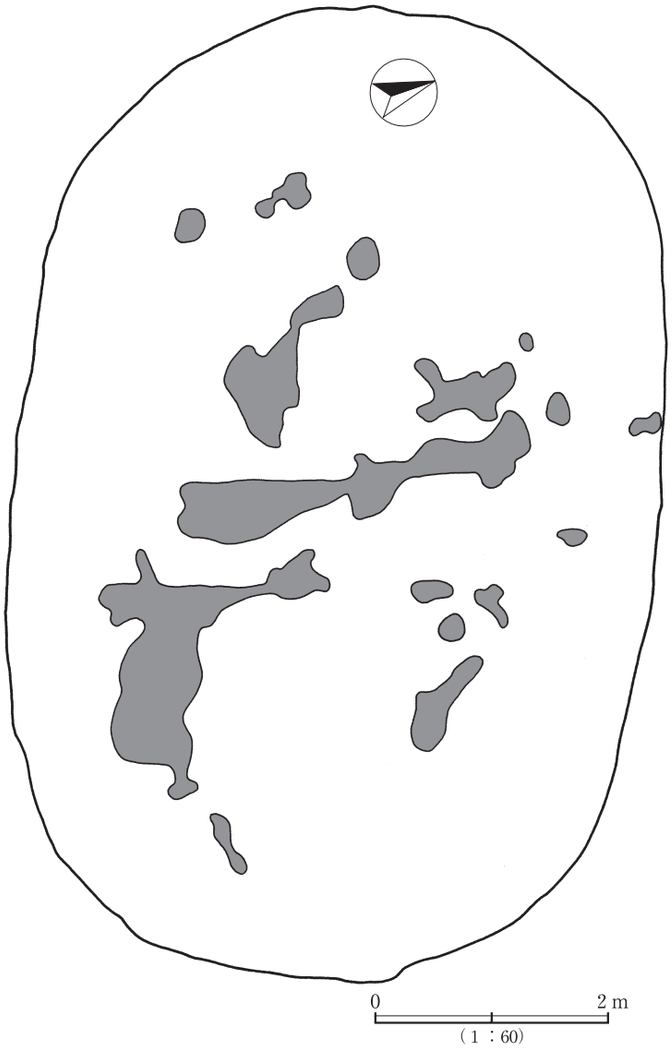
５　暗褐色土層
暗褐色土を主体としながらも粗いローム粒子が多量にまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

６　黒褐色土層
黒色土を主体に少量のロームと微量の暗褐色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

７　暗褐色土層
ロームを主体とし少量の黒色土と微量の暗褐色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

８　黒黄褐色土層
黒色土を主体とし少量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

９　黄褐色土層
ロームを主体としながらも多量の暗褐色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい



第18図　００２Ｄ（２）上層焼土

１．００２Ｄ（第17図，18図，19図，20図）

検出地区　Ｈ－２Ｇに位置し，調査区北東側に所在し，００２Ｍと重複している。

遺　　構　長軸（東西）8.28m×短軸（南北）5.50m。深さ0.55mの比較的大型の小判形，或いは隅丸長方形の竪穴住居跡である。床はロームのしっかりとした床で平坦である。住居跡中央部には硬化面が広範囲に広がる。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

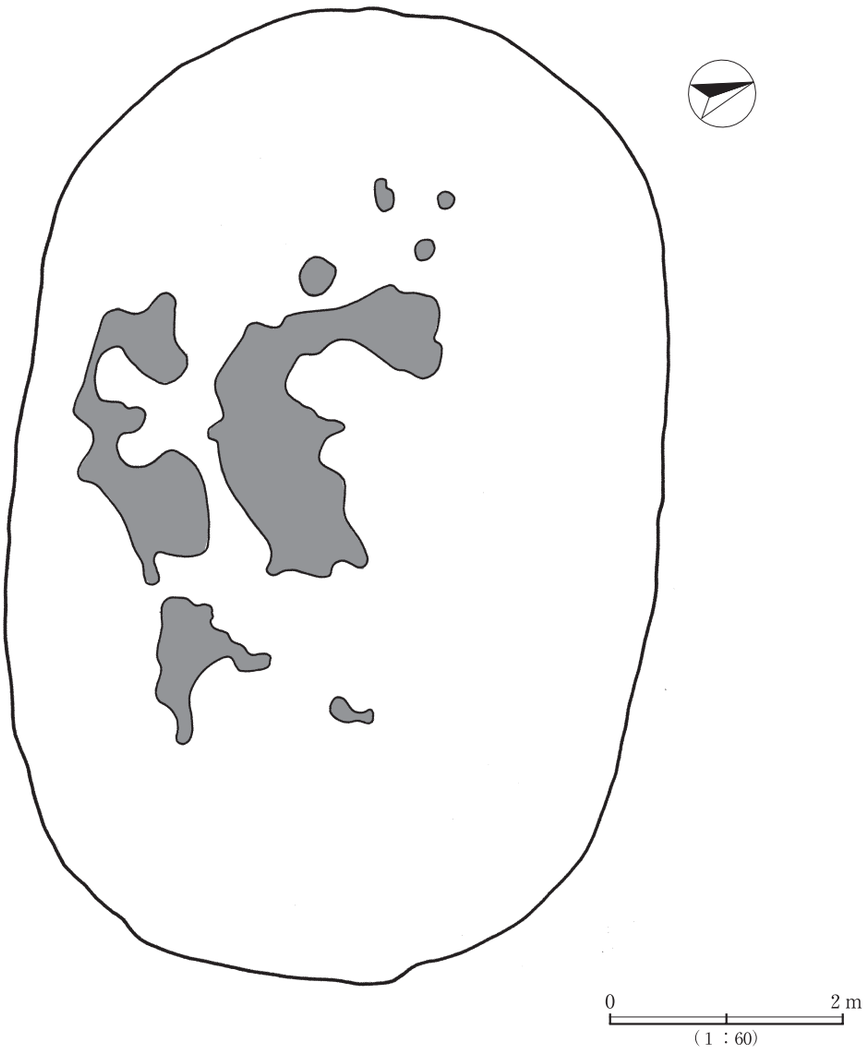
付属施設　Ｐ１からＰ４が柱穴と考えられる。平面形態が楕円形で北関東系の影響が想定される。

出入り口施設としてはＰ５或いはＰ６が考えられる。Ｐ５とした時に他の小穴群と形態に差が無いことと施設として貧弱な感があり，Ｐ６とした時には炉が近すぎる感がある。また，壁際には小穴列を検出しているが，その配列から住居の拡張が考えれる。Ｐ５を拡張前の出入り口，Ｐ６は拡張後の出入り口と考えるべきか。周溝は，しっかりと掘り窪められた周溝で南側を中心に約半周していた。

炉はＰ１，Ｐ２間の住居跡主軸からやや北側にずれた位置に所在していた。床面を僅かに掘りくぼめた不整形の地床炉で非常に良好な火床を検出している。

覆　　土　基本９層に分層される。おおむね自然堆積による埋没と考えられるが，覆土中に焼土層が２枚あり，埋没の過程で，定期的に火を焚いた様子が看取される。

2.indd 18　　08.6.1 0:09:18 PM



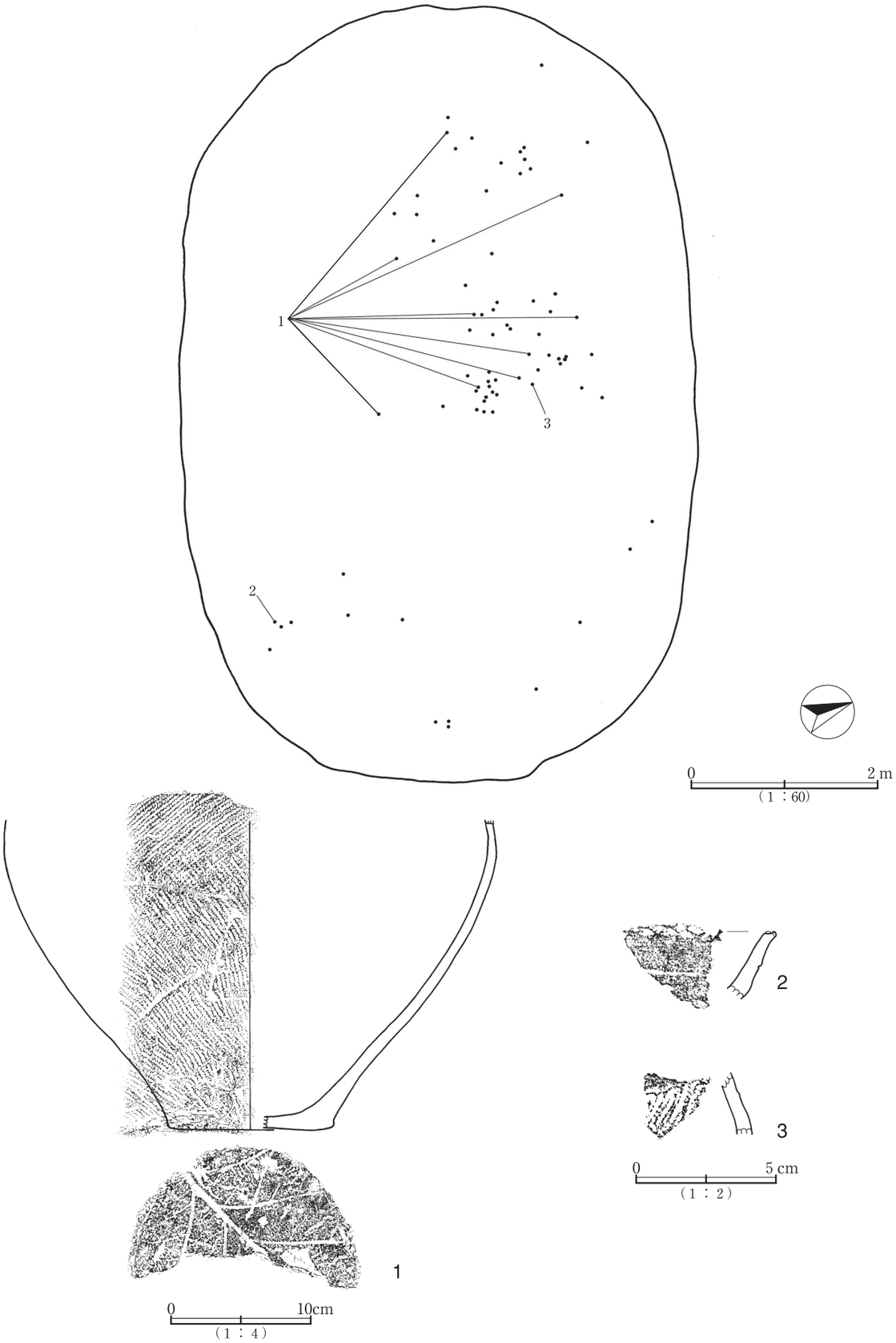
第19図　００２Ｄ（３）下層焼土

遺　　物　住居全体の覆土下層から床面直上からの出土がほとんどで少破片を中心に少量出土した。

１～３は何れも弥生時代後期土器である。１は床面直上からの出土で，やや大形の壺形土器である。胴部最大径付近から底部までが遺った例で，やや丸味を帯び，底部は横方向にわずかに張り出す。焼成は極めて良く，胎土中に石英・長石粒を多分に含む。器面を附加条第１種附加１条の羽状縄文で飾るが，同縄文を下端まで丁寧に施してある点が注意を惹く。底面に木葉痕をもつ。２は甕の口縁部片で，接合痕を残し，口唇部に刻目をそなえる。３は甕の胴部片で，下方を附加条第１種附加２条の縄文で飾る。

所　　見　出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

2.indd 19　　08.6.1 0:09:18 PM

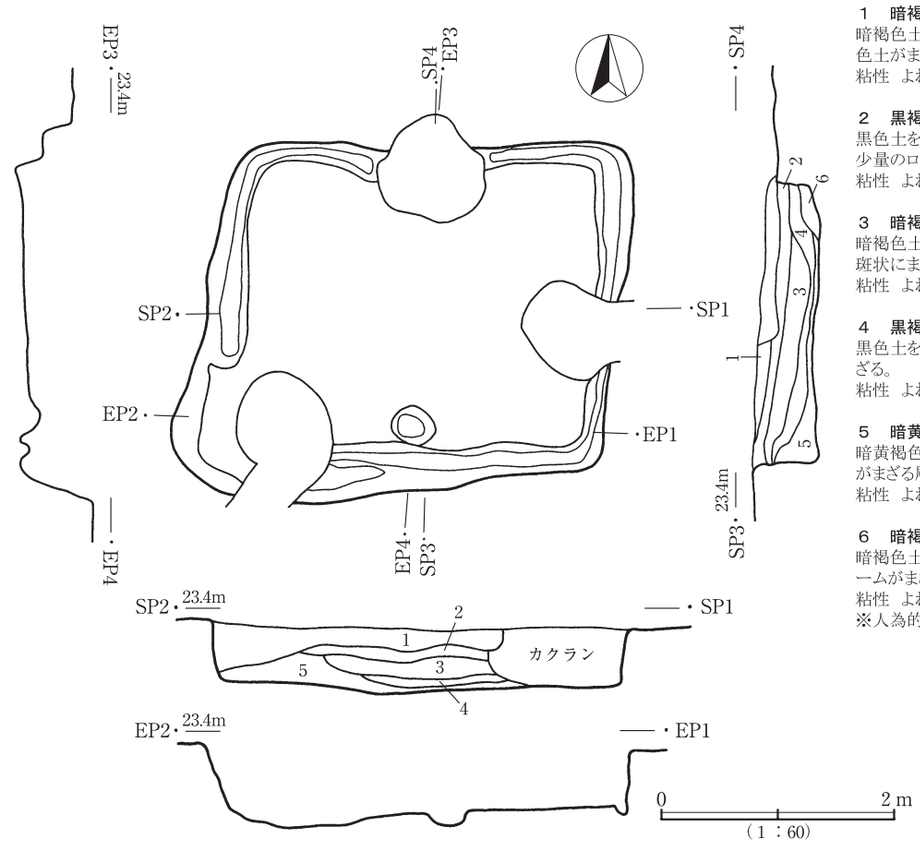


第20図　００２Ｄ（４）

2.indd 20
08.6.1 0:09:28 PM

第３節　奈良・平安時代

今回の調査で検出された奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居跡１軒，土坑３基であった。



１　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし少量のロームと少量の黒色土がまざる層。
粘性　よわい　　しまり　ややあり

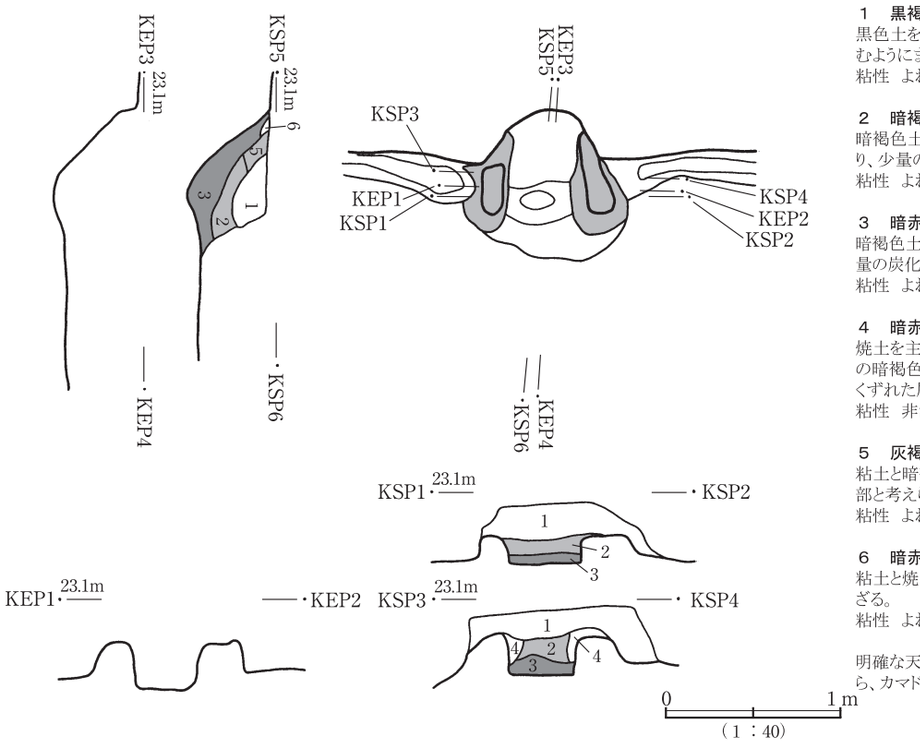
２　黒褐色土層
黒色土を主体としながらも多量の暗褐色土。少量のロームがまざる層。
粘性　よわい　　しまり　よわい

３　暗褐色土層
暗褐色土を主体としながらも多量のロームが斑状にまざり、少量の黒色土もまざる。
粘性　よわい　　しまり　よわい

４　黒褐色土層
黒色土を主体としながらも大量のロームがまざる。
粘性　よわい　　しまり　よわい

５　暗黄褐色土層
暗黄褐色土を主体としながらも大量のロームがまざる層。
粘性　よわい　　しまり　よわい

６　暗褐色土層
暗褐色土を主とし、少量の黒色土と微量のロームがまざる層。
粘性　よわい　　しまり　よわい
※人為的な埋めもどし



１　黒褐色土層
黒色土を主体に微量の白色粘土焼土がにじむようにまざる層。カマド外の土。
粘性　よわい　　しまり　よわい

２　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量の白色粘土が粗く混り、少量の焼土もまざる天井がくずれた層。
粘性　よわい　　しまり　よわい

３　暗赤褐色土層
暗褐色土を主体に多量の焼土がまざる層。少量の炭化材を含む。
粘性　よわい　　しまり　よわい

４　暗赤褐色土層
焼土を主体にしながらも、多量の粘土と少量の暗褐色土が粗くまざる層で2層同様天井がくずれた層。
粘性　非常によわい　　しまり　非常によわい

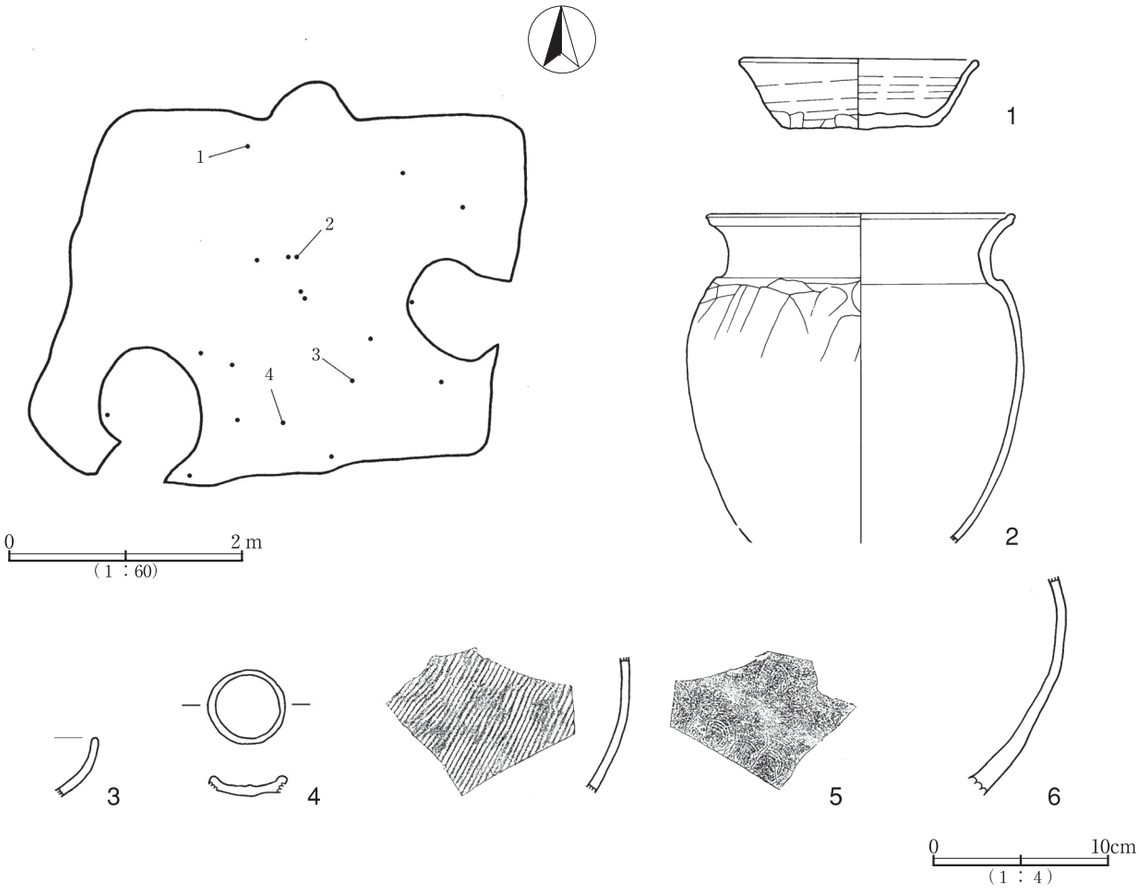
５　灰褐色土層
粘土と暗褐色土が粗くまざった層。天井の一部と考えられる。
粘性　よわい　　しまり　よわい

６　暗赤褐色土層
粘土と焼土が粗くまざり、少量の暗褐色土もまざる。
粘性　よわい　　しまり　よわい

明確な天井のセクションが見られていることから、カマドはこわされて廃棄されたと考えられる

第21図　００３Ｄ（１）

2.indd 21　　08.6.1 0:09:30 PM



第22図　００３Ｄ（２）

１．００３Ｄ（第21図，22図）

検出地区　Ｄ－５Ｇに位置し，調査区南側に所在している。

遺　　構　長軸（東西）3.58m×短軸（南北）2.92m，深さ0.50mの竪穴住居跡で，主軸方位は，ほぼ真北を示し，一部を撹乱で壊されているもののほぼ方形の竪穴住居跡と考えられる。床は，ロームを踏み固めたしっかりとした床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

付属施設　床面から小穴１基を検出した。出入り口施設と考えられる。

周溝は，しっかりと掘り窪められた周溝でほぼ全周している。ロームを主体とした暗黄褐色の覆土が充填されていた。

覆　　土　基本６層に分層される。多量のロームが粗く混ざる層が多く，人為的な埋め戻しが想定される。

カ マ ド　住居跡北壁のほぼ中央に位置している。砂質粘土で構築され，両袖とも残り，遺存状況は良好である。火床部から燃焼部は平坦な面を作るが，煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。２層は天井部が崩落した層である。天井部のセクションと考えられる層が見られるものの焼土と混在していることからカマドは住居廃絶時に壊された廃棄されたと考えられる。周溝は袖部の下にもめぐっていた。

2.indd 22　08.6.1 0:09:35 PM

遺　　物　全体の出土量は少なく，覆土上層から床面直上にかけて小破片を中心に少量出土した。

１は，ロクロ成形の須恵器の坏形土器でほぼ完形である。カマド脇，覆土下層～床面直上で底部を下に住居中央にやや傾いた状態で出土。坏内部にも粘土が入っていた。カマドが壊された時に流入したと考えられる。底部は回転ヘラ切りを行い，体部下端は小刻みなヘラ削りを行う。色調は灰褐色で，焼成は良好。２は，土師器の甕形土器で，カマド前，床面直上で口縁部から胴部が土圧で潰れたような状態で出土。口縁は外反する素口縁で，頸部はナデ調整，胴部上半は斜位のヘラ削りを行う。色調は橙褐色で，焼成は良好。３は，土師器の坏形土器の口縁片である。口縁は内湾気味に立ち上がる丸底の坏と考えられ，口縁外面は横位，斜位のヘラ削りを行い，内面は丁寧な磨きを施す。色調は，外面が褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好。４は，須恵器の蓋形土器で摘みの部分である。覆土下層南壁際で出土。扁平で中央が凹ん出いる。色調は灰褐色～橙褐色で，焼成は良好。胎土に雲母少量を含む。５は，須恵器の甕形土器の胴部片で，覆土下層からの出土。外面にタタキ目があり，内面には，叩く際のあて具の跡がある。色調は灰褐色で，焼成は良好。６も須恵器の須恵器の甕形土器の胴部片で，覆土下層からの出土。横方向のヘラ削りを行っている。全面に自然釉あり。色調は外面が暗褐色で内面が灰褐色。焼成は良好で，胎土に白色の砂粒を少量含む。

所　　見　出土遺物から奈良時代（８世紀後半）の竪穴住居跡と判断した。

２．０１１Ｐ（第23図）

検出地区　Ｅ－２Ｇに位置し，調査区北側に所在する。

遺　　構　長軸1.03ｍ×短軸0.93ｍの不整形の土坑で，深さは，0.17ｍである。坑底はロームの床でほぼ平坦であった。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　２層に分層され自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　覆土中から砥石に使用したと思われる軽石片が数点出土。

所　　見　出土遺物等から，奈良・平安時代の土坑と判断した。

３．０１３Ｐ（第23図）

検出地区　Ｅ－４Ｇに位置し，調査区中央に所在する。

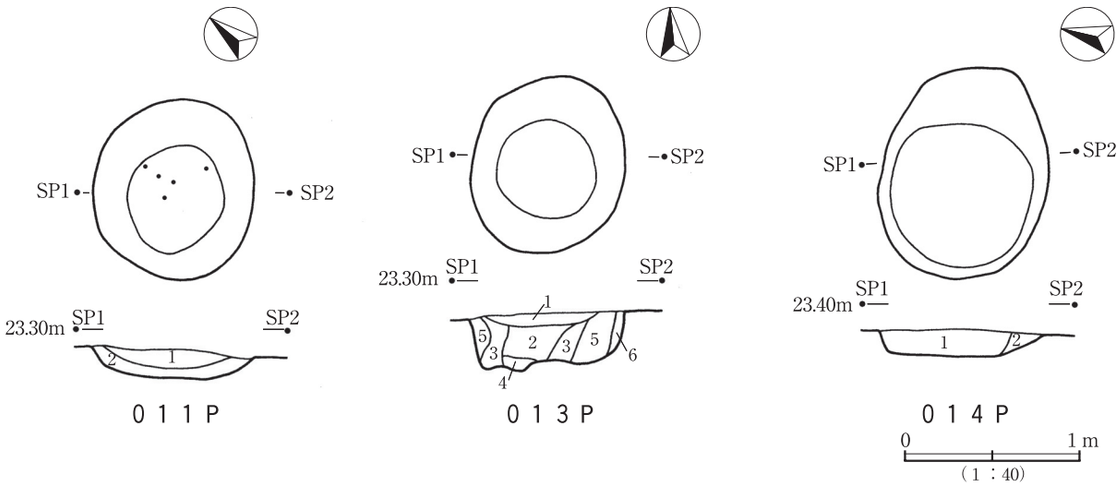
遺　　構　長軸1.04ｍ×短軸0.87ｍの不整形の土坑で，深さは，0.30ｍである。坑底はロームの底面でほぼ平坦。壁もロームの壁で急傾斜で立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　５層に分層され，人為的な埋め戻しが想定される。

遺　　物　出土しなかった。

所　　見　覆土の観察等から，奈良・平安時代の土坑と判断した。

2.indd 23　08.6.1 0:09:35 PM



１　黒褐色土層
黒色土を主体とし、少量の暗褐色土と少量のロームがまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい
２　黄褐色土層
ロームを主体とし少量の暗褐色土がまざる
粘性　よわい　　しまり　よわい

１　暗褐色土層
暗褐色土を主体とする層　焼土混入
粘性　弱　　しまり　普
２　黒褐色土層
黒褐色土を主体とし、暗褐色土が中量混ざる層
焼土・炭化材・ロームブロック混入
粘性　弱　　しまり　普
３　暗褐色土層
暗褐色土を主体とする層
粘性　弱　　しまり　普
４　黒褐色土層
黒褐色土を主体とし、暗褐色土・黄褐色土が多量に混ざる層　焼土・炭化材混入
粘性　弱　　しまり　普
５　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土が少量混ざる層
３層より明るい
粘性　弱　　しまり　普
６　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土が中量混ざる層
５層より明るい
粘性　弱　　しまり　普

１　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土が少量まだらに混ざる層
粘性　普　　しまり　普
２　暗褐色土層
暗褐色土を主体とし、黄褐色土が多量に混ざる層
粘性　普　　しまり　普

第23図　０１１Ｐ，０１３Ｐ，０１４Ｐ

４．０１４Ｐ（第23図）

検出地区　Ｅ－４Ｇに位置し，調査区中央に所在する。

遺　　構　長軸1.24m×短軸0.94mの不整形の土坑で，深さは，0.15mである。坑底はロームの底面でほぼ平坦。壁もロームの壁で緩やかに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　２層に分層され，自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　出土しなかった。

所　　見　覆土の観察等から，奈良・平安時代の土坑と判断した。

2.indd 24　　08.6.1 0:09:39 PM

第３章　　成果と課題

川崎山遺跡m地点の整理を終え，以下，時代を追って成果と課題を中心に若干の考察を試みたい。

第１節　縄文時代

今回の調査で注目すべき点は，早期沈線文系土器群が比較的まとまって出土したことと中期阿玉台式期の集落の検出にある。

先ず，早期沈線文系土器群についてであるが，沈線文系土器群の発生については，細沈線文系土器の検討を中心に関東の撚糸文土器が母体となったとする考えと，東北の押型文土器が影響を与えたとする大きく２つの考えがある。また，細沈線系の土器については，その文様構成の分析などから近年かなり編年的研究が進んでいるが，単純な平行太沈線系の土器については，石橋宏克氏の研究（１）等が散見する程度で，竹之内式から田戸下層式まで，その編年的位置づけが定まっていないようである。そこで沈線文系土器群に関わる２，３の問題点について川崎山遺跡出土例に即して考えてみたい。

八千代市域の早期沈線文期に関してはこれまで，坊山遺跡（２）等で細沈線文系の土器が散見していたが，平行太沈線の土器は出土例が少なかった。近年になり，ヲサル山南遺跡ｂ地点（⑤）において平行太沈線文系土器が比較的まとまって出土した。その時の出土様相は，細沈線文系の土器とは組み合わず，平行太沈線の単純な様相，或いは，平行太沈線と無文（擦痕）土器と組み合う様相であった。今回の川崎山遺跡m地点の沈線文系土器群のに出土様相も，ヲサル山南遺跡ｂ地点と同様の様相であった。

川崎山遺跡出土の沈線文土器と擦痕文土器の特徴を挙げると以下のとおりになる。

	沈線文土器	擦痕文土器
A　口 唇 部	角頭・外反	角頭・外反
B　内　　面	丁寧な磨き	丁寧な磨き
C　胎　　土	チャート等の小角礫を多く含む	チャート等の小角礫を多く含む
D　文様構成	口縁直下から太い沈線が横方向に重層している。 （平行太沈線文土器）	横方向の擦痕が顕著で沈線を連想させる器面調整をしているものがある。 （凹線文土器）

個々の太沈線文土器を見るならば，茨城県常陸伏見遺跡（⑨）出土の土器，或いは，千葉県中山遺跡（⑥），同県側高遺跡（⑦）出土の土器に類似し，擦痕文土器も栃木県天矢場遺跡（①），或いは，千葉県取香和田戸遺跡（③），同県向境遺跡（②）出土の擦痕文土器の範疇で捉えることも可能かと思われる。繰り返しになるが，川崎山遺跡，ヲサル山南，両遺跡での大きな特徴は，これらの平行太沈線文土器が細沈線と組み合わず出土し，更に擦痕文土器と組み合って出土していることである。沈線文土器，擦痕文土器両者を比較するとＤ以外の特徴は，沈線文，擦痕文両者に共通しており，擦痕文のキャンバスに沈線を施したものがヲサル山南，川崎山両遺跡で出土した平行太沈線文と考えることができる。これは，天矢場遺跡出土の擦痕文土器が，竹之内式土器を作る為のキャンバスとなったことと同じである。また，太沈線の母体になった土器として凹線文の存在を原田昌幸氏の指摘（3）があるが，擦痕文Ｄの特徴と沈線文Ｄの特徴は，擦痕文から凹線文そして太沈線文への流れをスムーズに説明することができる。

擦痕文土器は，栃木県天矢場遺跡で良好な出土例があり，八千代市内では向境遺跡がある。両遺跡における擦痕文土器（天矢場１類）は，初期沈線文土器とされる竹之内式土器の母体になったとされている

3.indd 1　　08.6.1 0:14:11 PM

（4）。また，天矢場･向境段階の擦痕文土器の出土様相が，竹之内式土器と共伴していないことからも，初期沈線文期（竹之内段階）以前の無文・擦痕文土器の段階設定が可能となる。これに対してヲサル山南・川崎山段階の擦痕文土器は，檫痕が顕著で凹線とでも呼ぶべき様相を呈しており，その土器と共に平行太沈線文が出土している。更には竹内式土器が出土していないことも注目される。これらのことを踏まえて千葉県を中心に主だった早期中葉の遺跡を列挙すると以下のようになる。

遺物名 / 遺跡名	擦痕文	擦痕文	太沈線	細沈線	備考	文献№
天矢場	○	−	−	−		①
向境	○	−	−	−		②
取香和田戸	○	−	−	−	L 地点	③
上野	○	−	−	−		④
ヲサル山南 b	−	○	○	−	明神裏 3 式	⑤
川崎山m	−	○	○	−		本報告
中山	−	−	○	−	太沈線は単独出土	⑥
側高	−	○	○	○		⑦
今郡カチ内	−	○	○	○	太沈線を田戸下層に	⑧
常陸伏見	○	○	○	○		⑨
竹之内	−	−	○	○	太沈線を田戸上層に	⑩

このように見ていくとき太沈線文土器は凹線とも細沈線とも組み合って出土しているが，擦痕文土器，凹線文土器，太沈線文土器の一連の流れと，ヲサル山南遺跡 b 地点，川崎山遺跡m地点のような凹線文 + 太沈線文の段階を想定することによって，編年的に古い，初期沈線文期段階に位置づけることが可能となる。

これに対して，ヲサル山南遺跡 b 地点，川崎山遺跡m地点の出土事例からは，太沈線文土器の発生は，擦痕文土器からの発展が考えられ，編年的に擦痕文土器の直後に位置づけられることが可能である。沈線文土器の発生に関しては，撚糸文，押型文の他に擦痕文土器からの発達を想定でき，多系統で発生したと考えられる。領塚正浩氏の指摘（5）にもあるように竹之内段階では，個体を異にしていた文様諸要素が次の三戸段階で統合されたと考えるのが妥当であり，文様要素統合以前の竹之内段階に平行太沈線土器が存在していたと考えれる。

川崎山遺跡m地点では，向境遺跡とヲサル山南遺跡の出土例を踏まえながら，八千代市における沈線文系土器の存在と平行太沈線の成立背景及び編年的位置を考える材料を得られたことを指摘できる。今後は，平行太沈線の継続と終焉について後続する三戸式，田戸下層式の関係の中で検討しなければならないと考えている。資料の蓄積を待ち機会を改めて考えてみたい。

次に，中期阿玉台式期の集落について触れたい。竪穴住居跡の検出数は，4 軒であったが，調査前の現況が，既存建築物があってかなりの撹乱を受けていたことを考えると，本来，更に多くの遺構があったことが考えられる。

調査された竪穴住居跡は，何れも不整形の掘り込みの浅い竪穴住居跡で，確実に炉と言えるものは検出し得なかったが，八千代市内の浅間内遺跡での検出例などから，炉なし不整形の竪穴住居跡と捉えることとした。また，石族や土器片錘の出土量が少ないことも特徴の一つとして挙げられるだろう。住居跡覆土中から，前期後半の土器も出土していたことから，前期の住居跡との重複の可能性もあり，尚，

3.indd 2 08.6.1 0:14:11 PM

検討すべき課題が残る。

集落の時期的な検討は，詳細には明らかにし得なかったが，Ⅰａ～Ⅰｂ期の古い時期に該当するかと思われる。また，住居跡覆土中から破片ではあるが，中期初頭の五領ヶ台式土器の出土や，中期初頭，五領ヶ台式を出土する土坑の存在などから中期初頭から阿玉台式の古い段階の遺構が多く存在していたことが想定される。

川崎山遺跡は，これまで，古墳時代中期を中心として弥生・古墳の集落跡として調査されてきたが，今回初めて，縄文時代の集落跡を検出すことができた。これまで調査されてきた弥生・古墳時代の集落については，新川に面した台地の先端部に展開しており，その地点での調査が主体を占めていた。今回のｍ地点においては，川崎山遺跡の展開する台地の縁辺部に位置してはいるものの，新川から離れ，谷津が入り込んだ舌状台地の基部に当たるような位置に所在している。このような立地上の違いが，時代を異にする集落展開の何らかの要因をなしているのであろう。

阿玉台式期の集落で八千代市内の例としてはヲサル山南ａ地点に集落があり，また，遺構を検出した遺跡にヲサル山南遺跡の北側のヲサル山遺跡，浅間内遺跡などがある。浅間内遺跡は，新川に比較的面した位置に立地しているとも考えられるが，ヲサル山遺跡，ヲサル山南遺跡とも新川に面した台地から谷津が深く入り込んだ台地縁辺に所在し，川崎山遺跡ｍ地点と立地が類似している。また，遺物を出土した遺跡に境堀遺跡があるが，この遺跡もまた，新川から谷津が深く入り込んだ台地縁辺に存在し立地上の類似点が多い。これら多くの遺跡の時期もⅠａ～Ⅰｂ期に収まる傾向がある。八千代市の阿玉台式期の遺跡は，主要河川からやや奥まった地点に立地し，阿玉台式期の古い段階に集中する傾向を指摘でき，川崎山遺跡ｍ地点もそうした遺跡の一つと言えよう。

本来，今回の調査のメインともなるべき時代であるが，時期的な検討など充分にできなかった。機会を改め，今後とも検討したい。

第２節　弥生時代

今回のｍ地点では，大型の住居跡が１軒のみが検出された。

遺物量は少なかったが，比較的大型の壺の胴部～底部片の出土を見た。胎土に砂粒を大量に含み，口縁部，頸部を欠損していて具体的な文様構成を知ることはできなかったが，胴部に附加条縄文による羽状構成を見ることができ，川崎山遺跡のこれまでの調査では出土しなかった例となる。胎土に砂粒を大量に含み，附加条縄文による羽状構成をもつ比較的大型の壺という点では，八千代市内の境堀遺跡（６）6-012 出土の弥生土器が類例として挙げられるかもしれない。

検出された竪穴住居跡は，比較的大型の小判型，或いは隅丸長方形の住居跡であった。川崎山遺跡で調査された弥生時代の竪穴住居跡は，ｃ地点で10軒，ｄ地点で19軒，k地点で１軒の26軒で，類型としては，しっかりとした柱穴をもつ大型の小判型の住居跡と柱穴のはっきりとしない小型の不整円形の住居跡が検出されてきたが，本例は前者に相当する。

また，本例は，これまで検出された地点から距離をおいた地点で単独で検出された例となったが，調査前には，既存の建物による撹乱を広域に受けていた為，阿玉台式期同様，本来，遺構数はさらに多かったものと考えられ，これまでの調査成果とは別の集落展開が考えられる。

3.indd 3 08.6.1 0:14:12 PM

第３節　奈良・平安時代

今回の調査では，奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒と土坑３基が調査された。

竪穴住居跡は出土遺物から８世紀後半と考えられる。これまでに川崎山遺跡では，奈良・平安時代の竪穴住居は，ｃ地点で２軒，ｄ地点で１軒，ｆ地点で２軒（７）の合計５軒検出され，本例で６軒目となる。ｍ地点で調査された住居跡は，ｃ地点の17号住とほぼ同時期と考えられる。これら以外の住居跡は９世紀代或いはそれ以降の時期と考えられる。検出数も少なく時期的なまとまりも無く，川崎山遺跡が所在する台地全体に散在する状況が看取される。古墳時代後期になり，集落が急速に縮小した原因は明らかではないが，奈良・平安時代に至ると276軒の竪穴住居跡が調査された白幡前遺跡，102軒の竪穴住居跡が調査された井戸向遺跡のように，集落が爆発的な伸張を見る北部萱田遺跡群の状況とは対照的である。個々の竪穴住居跡が，集落の中心から離れた位置に立地することになる。集落がピークを迎えた古墳時代中期から消滅しかかる奈良・平安時代の集落動態を，周辺遺跡との比較の中で検討してゆくべき課題と考えている。

参考文献

① 中村信博・中村紀男2002『天矢場』茂木町教育委員会

② 宮澤久史　2004　『千葉県八千代市　向境遺跡』八千代市遺跡調査会

③ 小久貫隆他1994　『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』（財）千葉県文化財センター

④ 高谷英一他1993　『上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書』四街道市・（財）印旛郡市文化財センター

⑤ 宮澤久史・伊藤弘一2008『千葉県八千代市　逆水遺跡f地点　北裏畑遺跡b地点　高津新田遺跡c地点　西山遺跡b地点　西山遺跡c地点　内野遺跡b地点　役山遺跡a地点　川崎山遺跡k地点　ヲサル山遺跡b地点』八千代市教育委員会

⑥ 石橋宏克他1988　『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター

⑦ 石橋宏克他1992　『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』（財）千葉県文化財センター

⑧ 小宮　孟　1984　『東総用水』（財）千葉県文化財センター

⑨ 小野真一　1980　『常陸伏見』常陸伏見遺跡調査会

⑩ 馬目順一他1982　『竹之内遺跡』福島県いわき市教育委員会

註

（１）石橋宏克　1988　「中山遺跡出土の三戸式土器について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター

1992　「三戸式土器の研究―側高遺跡出土の沈線文土器を中心として－」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』（財）千葉県文化財センター

（２）大野康男　1993　『八千代市坊山遺跡』（財）千葉県文化財センター

（３）原田昌幸　1991　『撚糸文系土器様式』

（４）中村信博・中村紀男2002『天矢場』茂木町教育委員会

（５）領塚正浩　1987「三戸式土器の再検討」『東京考古５』

（６）宮澤久史　2005　『千葉県八千代市　境堀遺跡』八千代市遺跡調査会

（７）本報告の整理については，未整理。

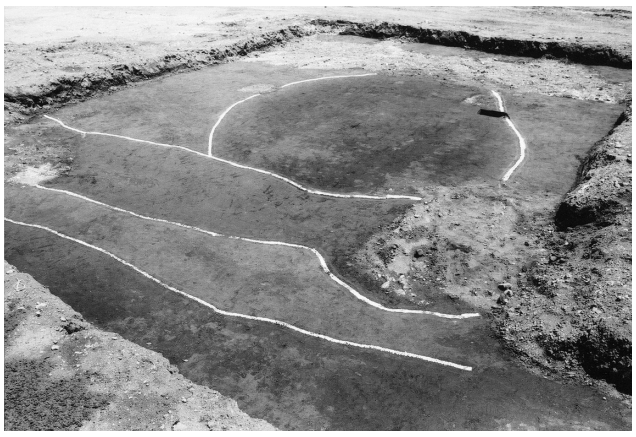
3.indd 4　08.6.1 0:14:12 PM

写真図版 1

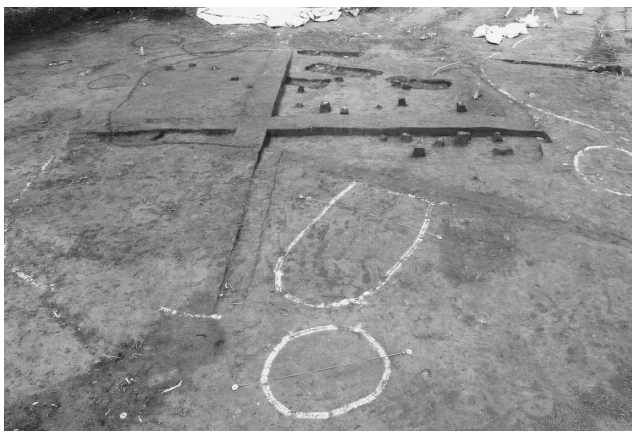
完掘写真全景

川崎山-写真図版01-06 08.5.30 11:39 AM ページ2

プラン検出状況



プラン検出状況

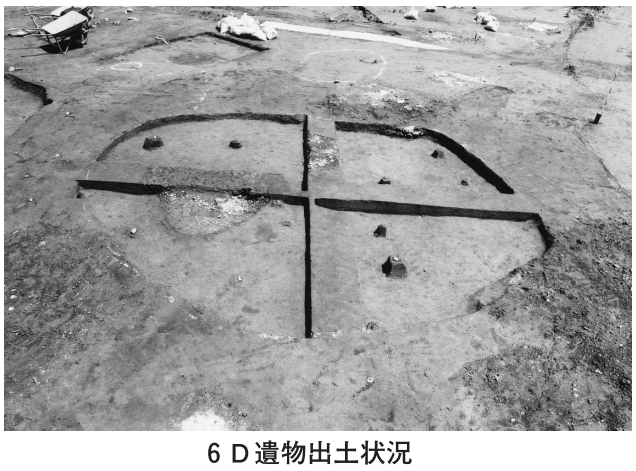


4 D遺物出土状況

4 D完掘状況

5 D遺物出土状況

5 D完掘状況



6 D遺物出土状況

6 D完掘状況

写真図版 3

7 D遺物出土状況

7 D完掘状況

1 I遺物出土状況

1 I完掘状況

6 P完掘状況

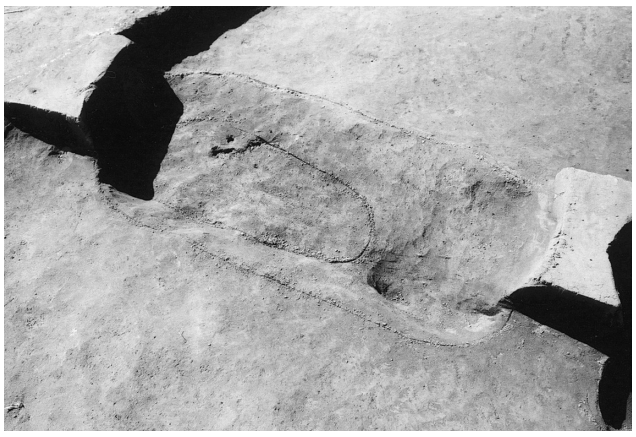
1 I遺物

7 P出土遺物

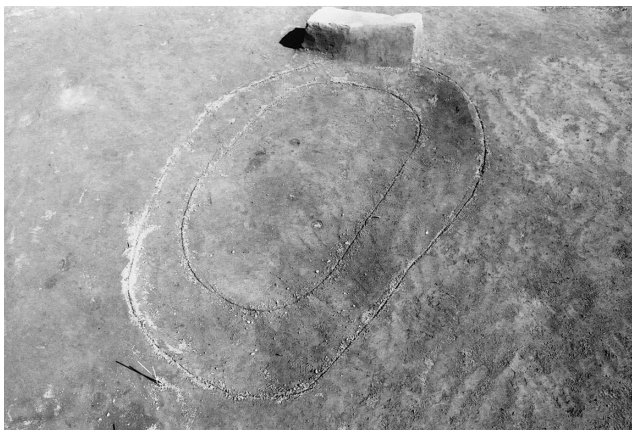
7 P完掘状況

川崎山-写真図版01-06 08.5.30 11:39 AM ページ4

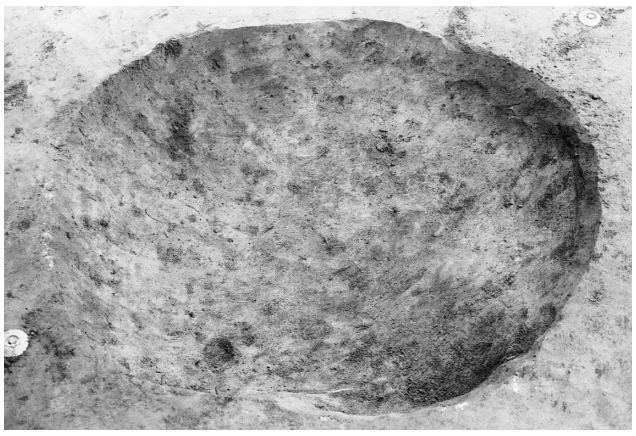
8 P完掘状況



9 P完掘状況



10P完掘状況



12P完掘状況

2 D焼土検出状況（上）

2 D焼土検出状況（下）

2 D遺物出土状況

2 D遺物出土状況（部分）

川崎山-写真図版01-06 08.5.30 11:39 AM ページ5

写真図版５

２Ｄ完掘状況

２Ｄ遺物

３Ｄ遺物出土状況

３Ｄ遺物出土状況（部分）

３Ｄ完掘状況

３Ｄカマド完掘状況

３Ｄ－１

３Ｄ－２

３Ｄ－６

川崎山-写真図版01-06 08.5.30 11:39 AM ページ6

007Ｄ－23

007Ｄ－24

007Ｄ－26

007Ｄ－25

009Ｐ－1

007Ｄ－27

007Ｄ－28

007Ｄ－29

007Ｄ－30

遺構外－1

005Ｄ－10

遺構外－2

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし　かわさきやまいせきえむちてんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市　川崎山遺跡m地点発掘調査報告書
編著者名	宮澤　久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276－0045　千葉県八千代市大和田138－2　　TEL.047(481)0304
発行年月日	西暦　2008年　（平成20年）　3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川崎山遺跡m地点（かわさきやま）	八千代市萱田字中台（やちよしかやだあざなかだい） 2265 － 2 外	12221	241	35度 43分 6秒	140度 6分 32秒	20070420 ～ 20070629	1,290 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川崎山遺跡m地点（かわさきやま）	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　4軒 竪穴状遺構　1基 陥穴　1基 土坑　5基	縄文土器、石族	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡　1軒	弥生土器	
	集落跡	奈良･平安時代	竪穴住居跡　1軒 土坑　3基	奈良・平安時代　土師器、須恵器	

要約

川崎山遺跡ｍ地点本調査の発掘調査報告書で、民間開発事業関連調査として、八千代市が直営調査として実施した。

川崎山遺跡は八千代市中央を流れる新川の西岸の台地に立地する。東側が新川に接し、南北がそれぞれ新川からの小支谷に区切られた舌状台地上に展開する遺跡で、ｍ地点はその舌状台地の北西の基部にあたる。

検出した遺構は縄文中期の竪穴住居跡４軒、縄文時代の陥し穴1基、土坑５、弥生後期の竪穴住居跡１軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒、土坑３基であった。

遺物は、縄文中期、阿玉台式を中心に出土。加えて、早期、沈線文系土器、前期、浮島・興津式土器が少量出土。石族１点、土器片錘４点が出土した。その他、住居跡を中心に、弥生土器、奈良・平安時代の土師器・須恵器が、それぞれ出土した。

これまで、市内での出土例の少なかった早期沈線文系土器が比較的まとまって出土し該期の新たな所見を得ることができた。同様に調査例の少なかった中期阿玉台式期の集落調査を実施することができた。

05.indd 1　　08.5.29 7:53:01 PM

千葉県八千代市

川崎山遺跡m地点発掘調査報告書

２００８（平成20年）

印刷日　2008年3月28日
発行日　2008年3月31日
編　集　八千代市教育委員会
〒276-0045 八千代市大和田138-2
TEL. 047-481-0304
発　行　八千代市教育委員会

05.indd 2　08.5.29 7:53:01 PM